市民文庫

クロォチェ

——市民的哲學者——

羽仁五郎著

河出書房

2029

市民文庫

2029

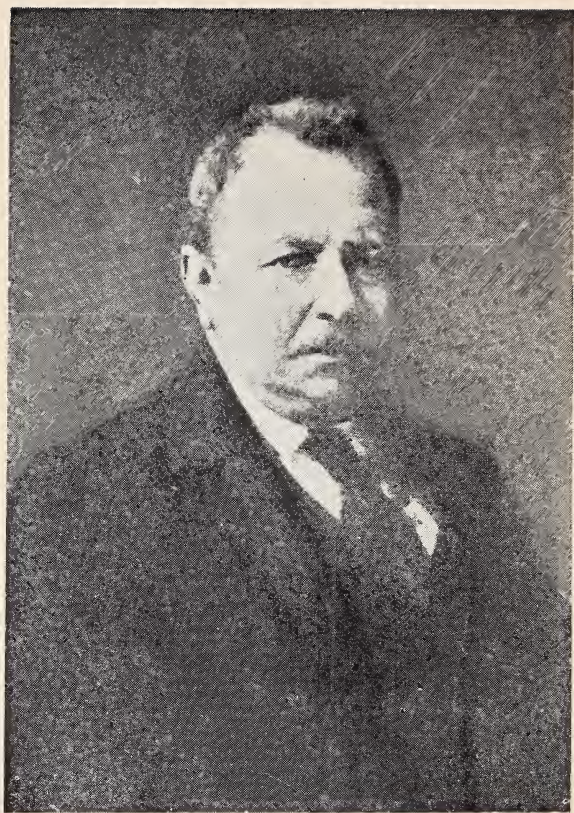
クロオチエ

――市民的哲学者――

羽仁五郎著

河出書房

著者略歴

明治三十四年三月二十九日桐生市に生る。大正十年東京大学法学部に入学したが、同年ヨーロッパに行きハイデルベルク大学哲学部に学び十三年帰国、東京大学文学部で日本歴史を研究、十五年クロォチェ「歴史叙述の理論および歴史」を訳出刊行した。昭和二年自由学園教授、四年日本大学教授となりこの年「転形期の歴史学」を著す。七年野呂栄太郎と日本資本主義発達史講座を企画その編集執筆に当る。同年「歴史学批判序説」を公刊、翌年思想の自由のために逮捕され日大教授を退く。以後数々の著書論文の筆をとったが十七年戦争に抗して筆を絶つ。二十年三月反戦論者としてたい捕されたが終戦後自由を恢復した。二十二年新憲法による最初の国会選挙に参議院議員に当選、翌年日本学術会議員に選挙さる。以後現在までの著書に選集のほか「生と死について」「都市」「理性の抵抗」「百万人の世界史」等がある。

目次

序にかえて

本書は、もと、序文なしに発行された。このことそのものに歴史的理由があった。本書の初版が一九三九（昭和十四）年に発行されたとき、著者は本書に序文をつけることができなかったのである。当時の日本の出版は専制主義の検閲の下におかれていた。そして、著者は本書の本文において、当時の検閲の抑圧に抵抗して最大限度の叙述を行ったので、それ以上に本書について、その成立の動機、本書の目的、著者の意図などに言及することは、危険を大きくすることであった。

そうした時代に本書が書かれ発表されたものであるという事実そのものが、本書の実体に属することなので、本書が戦後に再版されたときにも、序文なしで発行された。

しかし、そのあいだに、本書の成立について説明することが必要となってきた。そこで、こんど本書の市民文庫版が刊行されるについて、たまたまクロォチェの死に会して著者の書いたものを、ここに収録し、序にかえる。

一九五二年十二月一日　東京

著　者

クロォチェ死す

羽仁五郎

一九五二年十一月二十日ベネデト・クロォチェが死んだ。この日、この悲報がナポリから世界につたえられ、UP電報を電話できいたぼくは東京の灰色の空をあおいだ。

＊

反ファシズムの哲学者、これこそクロォチェその人である。ファシズムに反対し、戦争に反対し、ムソリニの支配の下にあったイタリアにおいて、最後まででたたかってついにうちかったクロォチェ、世界はこのゆえにこそ、いま八十六年のながい労苦をおわったこの人にむかって、花輪をささげるのである。

＊

相見ざる師弟、一九二六年以来たえずたがいに手紙と著書とをおくりかわして、日本において、イタリアにおいて、ファシズムに対するたたかいをともにしてきたぼくは、この月日いつもぼくの座右にあったクロォチェの晩年の深い苦悩のきざまれた顔のまえに、この人がいたからこそぼくも日本のファシズムに抵抗することができたのだ、と思う。

＊

昭和十六年五月、といえば、諸君はただちにそのころの日本がどんなありさまであったかを想い起すだろう。そのとき、日本のファシズムの法廷に被告として立っていた河合栄治郎博士がその日記につぎのように記している。

五月七日、『ファシズム批判』の各論に入り、訊問にたいし悪戦苦闘した。あまりに疲労が酷いので、診察をうけ、法廷を休み、病床についた。五月十七日箱根へ立った。芦の湯に二泊している間に、羽仁五郎氏の『クロォチェ』を夜の十一時から読み出し、一時半まで一息に読み終えた。ファシスト・イタリアにおいて自由主義を堅持して屈しないこの哲人は、自分を叱咤鞭達して、奮い起たしめた。ムソリニさえも手のつけられないクロォチェに比して、起訴されて自分を情ないと忸怩たるものがあった。高坂氏の『カント』、和辻氏の『カント実践理性批判』を携えて行ったが、永く読むに堪えなかった。……

クロォチェはイタリアにおいてファシズムと戦争とに反対してたたかっていたばかりではなく、日本における反ファシズムのたたかいにたいしてこのように深い影響をあたえていたのである。

＊

日本とイタリアとドイツとにファシズムが暴力をふるっていたとき、アメリカの知識階級がクロォチェにむかって、世界はファシズムの支配の下におちいるであろうか、と質問した。クロォチェはつぎのように答えた。

〃これは『気象学的』質問である。倫理的、知的の問題、政治の問題は、気象のように、われ

われの外にあるものではない。明日、雨がふるか、晴れるか、それは一に全く観測の問題である。しかし、政治上の問題は、一に全く、われわれが自からはたらいてわれわれの良心と識見と能力とにしたがってどうするか、の実践の問題である。

イギリスのマンチェスタア・ガアディアン紙は、〃ニウ・レパブリク誌のゆるしをもとめて、この公開状をその紙上にかかげた。

*

ドイツではハイデガアがナチスに屈し、日本では西田哲学が戦争に屈したとき、クロォチェひとりイタリアにあってファシズムに屈しなかった事実は、当時、世界の知識階級に希望をあたえた。現代の哲学は、民衆の不信のなかから、クロォチェによって、救われたのである。

*

クロォチェがファシズムとたたかうことができたのは、世界の知識階級のかれに対する支持による。そのさい、南イタリアの一都市バリの出版者ラテルツァ父子が、ムソリニの圧迫に抵抗して、クロォチェの著書および〃ラ・クリティカ〃(『批判』)誌の発行をつづけた出版者としての勇気に、世界は感謝するのである。新聞や雑誌や出版者がファシズムに屈してしまえば、万事休するのである。

*

クロォチェは、一生、大学教授とならなかった。彼はナポリの市中に、十八世紀のイタリアの

哲学の天才ヴィコ、マルクスの尊敬していたあのヴィコの住んでいた民家に住み、ナポリの市民たちは彼をプロフェソルと呼ばずに平等にシニョル・クロォチェと呼んでいた。

＊

戦後、イタリアが〝戦火のかなた〟から〝無防備都市〟また〝平和に生きる〟などの映画をつぎつぎと世界におくり出しているのは、その理由があるのである。ファシズムと戦争との下にこれとたたかっていたクロォチェに代表されていた力が、戦後せきをきってこれらの映画にあらわれているのである、と、ニウ・ステイツマン・アンド・ネイションが記している。

＊

イタリアのファシズムの最後の日、イタリア全土にあれ狂うドイツ・ナチスの軍隊に対し、イタリアの人民が民主主義連合軍に助けられてたたかった当時のクロォチェの日記は、そのままイタリア・リアリズム映画のモデルである。

イタリアがファシズムから解放されるために、クロォチェは民主主義統一内閣を組織した。クロォチェは観念的哲学者として共産主義に対して批判的の態度をとったが、反共には反対し、イタリア自由党が反共政策をとろうとしたとき自由党首を辞した。かれは世界ペン・クラブの会長として死んだ。

現在、アメリカに新しいファシズムが支配し、その支配の下に依存してドイツや日本にファシズムの復活がくわだてられているとき、アメリカにクロォチェのような哲学者があらわれること

ができるか、どうか。
ファシズムに屈し、戦争に屈し、平和をまもることのできないような哲学は、その名にあたいしない。

――一九五二・一一・二二、毎日新聞、共同通信、社会タイムス――

クロォチェ

市民的哲学者

一　市民的哲学者

諸君。

パンを求めて、石を与えらる、こんな経験に、諸君はあきているだろう。

電気のような激烈な性質をもったものを、われわれが家庭においてまた職場において、危険なく自由自在につかって、高度の生活また生産また交通をなすことができるのは、ながいあいだの科学者たち、その中にはあのシュタインメッツなどという人もいた、それらの学者の辛苦の研究によってあきらかにされたいろいろの法則やそれらにもとづいた変圧器などの文化の武器が、われわれに与えられているからである。そういうものを、われわれは、人生のいたるところに求めているのである。人生また社会の動力についての精密な研究にもとづくさまざまの法則また関係の知識なくして、この最近ますますはげしい人生、複雑な社会に生きることは、未開人が強力な電気装置をいじくる以上に危険である。

だからこそ、諸君は、思想また哲学の進歩に対して、それらが人生また社会また世界におけるわれわれの意識と実践とのあらゆる関係について精密な研究をもって、われわれの生活に確信とよろこびとを与えることを、求めてやまないのである。

哲学者たちは諸君のために諸君を代表して思索しているのだ、とわれわれは考えている。哲学者たちも、すくなくともはじめは、そう信じているのであろう。だから、哲学者たちが、ちょっとわけのわからないようなことを云いはじめても、諸君は信じてそれについて行く。だが、やがて、諸君は裏切られたように感ずる。諸君がせっかちにすぎる場合もあるだろう。しかし、実際は、どうも道がちがって来たらしい、と諸君が感ずるのも無理でないことが多い。諸君は、市民として市民的生活に確信とよろこびとを与えるような哲学または思想を求め、そのためならどんなこみいった道でもいとわない。しかるに、哲学者たちはいつか職業的哲学者や小哲学者や、市民を上から見下して説教することを職業としようとしてでもいるかのひとびとだけに語りかけているらしい、ということを諸君は感ずるのだ。いつか、道がわかれて行くらしいのだ。哲学教授だとか著述家だとか、いわゆる先生になろうとしてもう鼻の下にひげがはえかかっているようなひとたちや、いつかそんなひとびとのお仲間にいれてもらえるかもしれないとついて行くひとたち、それからもすこし無邪気ないわゆるファン、そういうひとびとは、そっちの道へ、しかつめらしく、ときどきあくびしながら、ついて行く。いずれにしても、それにはその理由があるのだろう。しかし、諸君の大多数は、ちょっとそんな気にはなれない。諸君は哲学で飯が食えるとも思わないし、思想上の官僚となって飯を食いたいとも思わないし、そういうお仲間に入れてもらうために雌伏何年とかいうようなことをすることもつまらぬこととしか思えない。要するに、そんな気になるには、諸君はあまりに市民的であり、人の上に立ったり人の下に立ったりして生き

るのでなく、人の世話をやいたり、説教したりして月給をもらうのでなく、もすこし市民的な正業に就いて勤労し生産的に生きる市民的名誉心と平等生活の習慣がつよすぎるのだ。
精密の研究のために、諸君は満腔の信頼をささげる。民衆は決してそれほどせっかちではない。彼等は百年でも千年でも待ったのだ。人生の現実から高くかけはなれ、ほとんど何の関係もないようにさえ見えるほどの研究にも、諸君はその研究に誠意を信じてそれを支持する。飢えた民衆が、かれらの飢えを直接どうみたすことのできるのでもない純粋の芸術家たとえば優秀の音楽家を、その高度の芸術の表現のゆえに、心をかたむけて讃美することさえあるのである。民衆は、自分たちが電車賃にも窮しているときでも、自分たちが一生のあいだに飛行機に乗れるようなことなどは決してありそうになかろうとも、ある新しい長距離飛行の成功に支援をおしまないし、高度の構造や性能に絶讃をささげるのである。しかし、そうした民衆の信頼をよいことにし、精密な研究また高度の表現ということやそのためのやむを得ぬ一応の現実遊離または超越ということを名として、それらにかくれ、全く民衆を離れ、人生の現実を離れ、せまい仲間だけの得意におごって他を顧みぬものがあれば、民衆は裏切られたるの感なきわけにはいかない。
しかしまた、民衆的といって、専門の哲学者また学界の権威などというひとが一般のために述べたなどというものが、こんどは一般われわれいわゆる市井の世俗人の常識より以下の意識の低級や非常識を暴露しているのや、国民を導くなどといって、たいそうにわれわれ国民を上から見下し、国民は赤子どころか自分では手足の動かしかたも知らない、自分では物を見ることも口の

ききようも知らないとでもするかのように、ありがたい御訓誡、または、べしべからずづくめの御説教、それこそ国民が自分から手も足も出せなくなるようなお世話やき、そうして自ら国民の師表とか範を垂れるとか称する官僚の言行に、民間ならばいかに利慾または栄誉に迷えばとて、あるいは衣食に窮したとて、自から恥じ、敢てなさず、いさぎよしとせざるほどの無恥無慚、また我執沙汰、また時流便乗、その他あさましさのかぎりをつくすさえなしとせないのは、諸君の最も鼻もちならぬとするところだろう。これらに比すれば、世間や時代も知らず、いわゆる人生の現実をも遊離し、超越し、いわゆる精密高度の研究に没頭して社会のそとにあるかの観さえある学者乃至芸術家の純粋蕪雑乃至は脱俗ぶりのほうが、諸君、民衆としても、どんなにか好意がもてるだろう。

誰か、人の子パンを求むるに石を与えんや。言まことに然り。而して、石ばかりである。けれども、それはパンを求める者の罪ではなく、石を与える者の罪である。

諸君、われわれはあくまでパンを求めてやまないのである。そして、ここに、民衆の求むるパンとは、精密なる研究をもって民衆の生活の進歩に確信をあたえることである。そして、かくの如き思想家として、その稀なる一人として、ベネデト・クロォチェは、現代イタリア随一の哲学者たるのみならず、内外古今を通じ世界的の思想家としてイタリア及び世界の民衆に親しまれているのである。

クロォチェの書を読むと、一方では、専門哲学あるいは論理学または認識論また哲学史また方

法論の最高の発達の状態をことごとくとりいれ、それにもとづいて更に高度の新問題の解決にむかう精密の研究、すなわち、現代の世界の哲学界の最高の代表者が如何なる研究をなしつつあるか、如何なる見解を持しつつあるか、が、われわれにはっきりとわかると同時に、他方では、そのあいだから一般人としての諸君われわれの現代の複雑困難なる生活の現実に、動かすべからざる確信にもとづくよろこばしき希望があたえられて来るのである。これは、クロォチェの稀なるスタイルの文体にも現われている。生きた現代の民衆のそっちょくな言葉でどんな高度の問題やかくれた関係やあらゆる危険のなかをも、自由自在に、すこしのあいまいも恐怖もなく、欺くべからざる人生の意識と行動とのよりどころを、最も明朗に解明して行く。クロォチェの哲学を理解するには、入門書はいらない。講座もいらない。クロォチェの書を読みながら、諸君は、がまんしてこんなことをやっているうちにそのうち自分も何とかなるのだろうからなどと、年季を入れて何時かのれんを分けてもらうとか、あるいは恩給とかまたは抜擢とか順番のまわってくるのを待っている人のように、自から慰め気をとりなおすに苦心するなどの必要はない。クロォチェの書を読みおわったとき、諸君は、職業的訓練をうけた感じもしないし、専門の一課に長となるの資格をでも得たような気もしないし、自分も何か書いてみるとか教えてみるとか、ひとに説教する材料や論法をしこんだような心持などにもならない。クロォチェの書を読みながら、また読みおわったとき、諸君は、ただ真実に生きる、市民的に生きる希望と確信とをたかめられるのを感ずるのである。ひとを圧迫せずひとに圧迫されず国家社会の誠実平等なる一員として、自己の

昇進よりもそれぞれの立場またはもちばまたは事業乃至正業に力をつくすことを自他相互にあい敬し、外物よりも内的の人格を尊しとし、ただ真実に生き、市民的に生きる、すなわち人間的に生きる、かくのごとく民衆的に生きる希望と確信とをあたえられ、たかめられるのを感ずるのである。

市民的哲学者たることは、クロォチェ自から最大の栄誉とするところである。「学問を研究する者として、同時に、市民として生きる。そこに、わたくしはわたくしのポストすなわち地位またはもちばに立ち、わたくしのベストをつくし、ひろい意味で政治的に生きる。ここにわたくしは自から安んずるの意識を得た」とクロォチェは『われ自身の批判のために』のなかで云っている。そしてその故にクロォチェは「新しい時代の青年の友」と呼ばれているのである。「わたくしの眼の前にしている理想は、わたくし自身からというよりは、寧ろわたくしのさまざまの体験から得られたのである。わたくしは、一方では、ひさしくアカデミイの世界に住み、その正しさと誤りとを充分に知ることができた、と同時に、他方では、そのあいだに、現実の人生についての感覚およびその現実の人生からうまれそのなかにたえず自から新たにして行く文学及び学問についての感覚を、幸にして失わず、この現実の人生の意識の成長をまもりつづけてくることができた。そこで、わたくしは、一方では、ディレッタントや思想上に方法を無視するひとびとに対してたたかう、と同時に、他方では、アカデミイ学者が偏狭に陥りまた芸術及び学問の外形にうきみをやつすのに対して論争せねばならなかった。」(Benedetto Croce : Contributo

alla critica di me stesso, 1915. Die Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungen, 4ter Bd. Leipzig, Verlag von Felix Meiner, 1923)

二　クロォチェ哲学の成長

クロォチェの哲学の現代に於ける最大の特徴は、それが終始一貫、民衆の中に成長して来た、ということである。

クロォチェは、かならずしも世にいわゆる立志伝中の人ではない。彼の生涯は甚だ恵まれたものでもなかったが、また貧苦の中に成長したというのでもない。

彼は一八六六年二月二十五日、中部イタリアのアブルッツオの山地のペスカッセロリの町に生れた。これはあのイタリアをたてに走っているアペニン山脈が、ロマの名によって呼ばれている部分がおわって、ナポリの名によって呼ばれている部分がはじまるあたりの南西側で、ペスカッセロリの町は、そこから、西へ約百キロ出ればロマに至るが、南へ同じく百キロほど下ればナポリに出る、というところにある。クロォチェはそこの古い地主出身の富裕な市民の家に生れた。そしてこのあたりは歴史的にも現代にもナポリを中心とする一地方を成していたし、クロォチェの少年時代に、彼の家は主としてナポリに住んでいたので、彼はナポリ市民の子として育ったわけである。彼の父は、いわゆる政治家的大言壮語を好まず、市民的業務に専念するというふうな人であったらしく、彼の母は**カトリク信者**であって、日常に勤勉な、そしてまた文学を愛し多く

書を読むことのすきな女性であったようで、そのほかにまた彼の父の従兄弟ベルトランド及びシルヴィオの両スパヴェンタはともに学者にしてまた政治上にはたらき、その兄ベルトランドははじめ僧職に在り後に之を出て哲学に進みヘエゲル主義者となり四回議員に選出されて議会にも立ち、その弟シルヴィオまた哲学者であって後にしばらく大臣としてイタリア文化に寄与した。クロォチェ自から、彼の幼い頃、彼の父が、現実を遊離したいわゆる政治家のえらそうなおしゃべりを批判し、時には、自から愛国者気取りで人を陥れたりいわゆる自称愛国を職業としたりするようなひとびとの陋劣を不快とするのを聞いた、としるしている。

小学校時代について、クロォチェは、その頃自分がいろいろにちがった性質をもった同年輩のおおぜいといっしょに生活したことから、幼いながらに人間おたがいの人格にたいする尊敬また誠意の感情また人として恥を知る感覚がかたちづくられたことの意義をとくに銘記し、どうかすると家庭教育などの方面ばかりを重く見て学校教育の弊害などばかりを非難するひとびとの意見には断じて賛成できない、といっている。

母たちのカトリク的信仰にもかかわらず、またその家庭から送られた学校は小学から中学もカトリクの学校であったのに、わかいクロォチェの最初の思想的体験は、上からおしつけてくる伝統的な信仰に対する懐疑的精神となってあらわれた。これもきわめてあたりまえのことである。古い時代に成長する新しい時代が、いろいろの疑問をいだくのは、健全のしるしである。何にも疑問がないようでは、成長も進歩もない。早くから一定の地位をねらうような官僚的な立身出世

主義いわゆるえらくなる主義でかたまっているひとびとのあいだでは、人生や社会について本気の疑問もおこらないだろうし、またおこさせないだろうが、人間らしい人生を求める市民また民衆人としての青年は、当然、現在よりもいっそう高い理想を求めるから、現状にたいして疑をいだき、その疑問から真理を求める心が進んで行く。しかし保守主義から見れば、懐疑ということは面白くないようにいわれがちである。そこで、わかいクロォチェも、この「精神的危機」をあたかも一つの恥ずべき病気ででもあるかのように、人にかくしていたと書いている。だが、この精神的危機または懐疑は、健全な市民的な精神のしるしであった。現に、「この懐疑は、いわゆる信心ぶかいひとびとが想像または主張したがるように、無神論者の講義をきいたり、そういう本を読んだりしたためによびおこされたのでもなければ、ためにするところあろうとする人からひそかに耳にささやきこまれたためでもなく、スパヴェンタなどの哲学者の言葉をきいたためでもなく、却って自分の入れられていた信心ぶかい学校の監督者たる敬神家その人がわれわれ学生の敬神の精神を強化しようとしてくわだてた『宗教哲学』の講習やその他の訓練そのものが、それまでそうした問題をべつにどうとも思っていなかった自分に、逆に理性の活動をよびさまさせることになったのであった。」クロォチェは、すこしの皮肉もまじえず、そう記している。だから、彼は「自分のこうした動揺を大いに悲しみ不安におもい、病人が薬を求めるように、なおさまざま敬神的の書物等を読む努力もしたが、そしてその間にはその信念の熱烈さには充分感じいったものさえあったが、自分としては、そうすればするほどますます、いわゆるつめこみ的な宗教的

観念にたいして冷静になって行くのをどうすることもできなかった」としるしている。

健全なる懐疑的精神は学問の母であり、真理を求むる進歩は疑を発する批判より生ずるということはあたりまえのことである。しかし、一方からは、うすっぺらな懐疑や無責任な批判などという悪評があり、他方では、単なる学究でありたくないというもとは無邪気な名誉心からいつのまにか学問の本分を棚にあげまたは自から軽んじ或はわれからふみにじってあぶはちとらずはまだしも学問と実社会と自他双方を害するにいたる誘惑もないといえぬ。懐疑また批判は、学問の世界とその他の世界とをきりはなしもせぬが混同してしまうこともすべきでないとする真の学問の本分を知るものにとっては、一方からは、謙遜に、他方からは、矜恃として、あくまでまもるべきものであろう。懐疑無用、批判無用なりとするものは、学問をも無用とするものである。もし学問科学が必要ならば、懐疑は必要であり、批判は必要である。批判的でない学者、ものほしそうな学者が今日に多すぎるとすれば、クロォチェの如く、懐疑に学問の志を立て、ついに『ラ・クリティカ』(『批判』)誌を創始し、爾来実に三十有八年、あらゆる周囲の事情の変化に堪え断、乎としていわゆる時流に屈せず、静かにしかし敢然とこの『ラ・クリティカ』を本拠として批判の大義に献身しているのは、平凡の非凡というか、当然を不当然のなかにまもるものというべきか。近代市民的哲学の不撓の成長をしめすものである。

なお、クロォチェは、自からその少年時代について、彼が大学に進もうとしたとき彼の母がスパヴェンタ等の講義をきいて宗教の根本を失うなといいましめたが、彼は必ずしも之に従わず、ス

パヴェンタの形式論理学の講義等にも列し、しかしまたスパヴェンタをしてその聴衆中に彼の従甥の居ることをついに知らしめもしなかった、というような話をもしるしている。そのあいだに、六七歳の頃から母につれられて書店に行くことをなによりよろこんだクロォチェは、ようやく成長して来た彼の健全なる懐疑と批判とによる真理の探求を文学いなむしろ歴史の地盤の上になしとげて行こうとするに至ったようである。

この頃、一八八三年ナポリ湾上のイスキア島カサミッツィオラの大震災に、十七歳のクロォチェはその最愛の両親及びただひとりの妹を失った。必ずしも波瀾の多くなかった彼の生涯に、これはいかばかりか悲痛の事件であった。クロォチェ自身はこの時のことについて言葉すくなにしか語っていないが、それだけあの敏感なる彼がしかも十七歳の青春の若さをもってこの悲痛に際会してどれだけ深刻に人生の真実を求めて苦しんだかを推察せねばならない。この時クロォチェ自身重く傷つき、その後今にいたるまで彼はなお幾分跛をひいているのである。孤児となったクロォチェは兄弟ただ二人、父の従兄弟にあたるシルヴィオ・スパヴェンタのロマの家にひきとられた。それは、いままでの両親の家とは正反対の、政治家の家であり、そこにはたえず、代議士たちや教授たちや言論界の人々が出入し、議会における討議を直接に反映した政治論法律論学問論が渦まいていた。クロォチェはこのいままでとかわった生活にすぐさまひたりきることもできなかった。また当時デプレティス内閣の政策も不徹底であり、之に対するスパヴェンタ等の態度も嘲笑的であり、これらを前にしてクロォチェは政治に対する信頼も感激もよびおこされること

ができなかった。あまりに思いもかけなかった不幸のために、彼はしばらく打ちのめされたようになっていたのだ。「この数年は私の最も悲痛のまた暗い年月であった。夜、枕に頭をつけたとき、私は翌朝もはや目覚めることのないようにねがったこともいくたびかあった。いな、私は自殺を思ったことさえあった、」といっている。ところがこの際、スパヴェンタの家で、後のイタリア・マルクス経済哲学の代表者にして当時はヘルバルト倫理哲学の立場にいたアントニオ・ラブリオラを、個人的に知り、またその講義に接したことは、悲痛の底にあったクロォチェに「人生に対する信念」をあたえた、とクロォチェ自から記している。クロォチェの後年の最大の主著の一たる『実践の哲学、経済學及び倫理学』Filosofia della pratica. Economica ed Etica.（独訳、英訳等あり、邦訳、桂井氏・大正四年・大日本文明協会）が、この頃のクロォチェの苦闘から生れたところもすくなくなく、したがってクロォチェ自身から見ればこの書は一面ではほとんど彼の自叙伝を成している、という。

「人生に対する信念、」これがクロォチェの哲学の成長のモティヴになったということを、諸君はよく理解することができるだろう。そして、『実践の哲学、経済学及び倫理学』一巻の成立によって、クロォチェの哲学がどういうものであるかを想像することができる理由をも、諸君は了解したであろう。

「人生に対する信念、」クロォチェ哲学の目的は、それ以上のものではない。だから、いまさら人生に対する信念などを求める必要のないひとびとまたは時代にとっては、クロォチェの哲学はあ

るいは退屈であろうかもしれぬ。また、その人生とは、クロォチェの生涯がたいして艱難のそれであったのでもなかったから、近代労働者農民階級または一般に近代の勤労人民の切実な人生の問題の解決には、あるいはさほど直接的ではないように感ぜられるかもしれない。これらの意味でもクロォチェの哲学は二十世紀、といっても、十九世紀末から二十世紀初、すなわち最近の過去から現代にむかっている二十世紀思想であるともいえよう。だが、「人生に対する信念、」クロォチェ哲学の目的はそれ以下のものでもないのである。人生の信念はすでにわれにありといってみたところで、また過去から現代にむかうよりも現代から将来にむかうといったところで、その人生の信念が浅薄であったり、現代をほんとうに直視しているのでなかったりしていたのでは、不充分な懐疑はたえず、いろいろの疑がわいてくることをふせぎ得ないし、外面的にいかにいばってみても内的に確信がないのをかくすことは結局できないだろう。思いがけない天災に最愛の肉親を失い自から傷いて、人生に空虚な希望をいだくことができないことを知ったのは、富裕な家に生れた青年の個人的な体験にすぎなかったともいえまいし、形式的なカトリク的信仰や大言壮語的な政治主義やいわゆる愛国主義の誇張に対する懐疑にも時代的また社会的なものがあったろうし、ラブリオラまたはマルクス・エンゲルスの世界観に新しい人生を見ることができたというのも、単に一時の潮流の動きにさそわれただけでもなかったろうし、職業的哲学者のように哲学を哲学からはじめず、いわゆる人生哲学者のように原則よりも応用に身をやつすこともできず、思想官僚のように現代の現実の悲惨を無視してうわべばかりりっぱそうなことをいっていること

もできず、人生の悲痛の現実を直視し空虚を懐疑して真の人生に対する信念を精密なる原則の確立の上にもとめようとしたクロォチェの哲学は、万人をうち、はげまし、なぐさめ、永遠に、不朽に生きるものをもっているのである。悩みなきひとびとはいわゆる教授先生の講義教科書著書につくべく、悩みを自慰して満足しようとおもうひとびとのためにはシュペングレル的評論などもあり、ファシスト官僚はヂェンティレに現代イタリア哲学を得たりというが、悩めるイタリア民衆いな世界の民衆はクロォチェを愛読し、過去より現代を直視するクロォチェの信念に真に現代より将来への動向を確実に把握すべき哲学の武器を得るのである。

一八八六年ロマからナポリに帰ったクロォチェは、ドイツまたイスパニア、フランス、イギリス等に旅したほかは、ほとんどつねにナポリにあって、一人のナポリ市民として生活して来た。その間に彼は、一九〇〇年三十四歳のときナポリ市臨時政府委員に選ばれてナポリ市地区の小学校中等学校等の教育行政に尽力し、一九二〇年から一九二一年にかけてはヂオリッティ内閣の文部大臣に就任し欧洲大戦後のイタリアの文化建設なかんずく学校教育の改革に努力し自由主義の政治の原則の発揮に非凡の識見を示し、衆望にそむかなかったが、彼自身としては前の場合にも後の場合にも、どうしても全力をつくすことができたという感じは得られず、やむなく立ったそれらの短い期間をのぞいてはクロォチェは決して官吏とならず、大学教授の地位に就くことさえせず、一生を市民として生き抜くことに、より大なる意義と光栄とを見ている。

人の上に立たず、人の下に立たず、独立自由の学者として、クロォチェが一生何等の権力に依

頼せずもっぱら民衆により民衆の間に立って著述をもって社会的任務に全力をつくすことができたについては、アドリア海にのぞむアプリアの都市バリの出版者ラテルツァの忠実と誠意とにまつところもすくなくなかった。クロォチェは自からその自伝『われ自身の批判のために』の中にこの「バリの若き出版者ラテルツァ」の勇気と才能とに感謝しているが、このすぐれた出版者的精神には世界も感謝するのである。これは学問の自立が識見ある出版者によってたすけられた一つの世界文化的な事実である。

こうして、クロォチェの主力は、著述活動にささげられた。

クロォチェは実証的な歴史研究からはじめた。『ナポリ革命、一七九九年』とか『ナポリ劇場、ルネサンスより十八世紀末まで』とか、彼がナポリ市民としてそのナポリの歴史を考証したそれらがあらわれた。と同時に、彼は、外的な考証に満足せず、歴史の内的意義を考えはじめ、ヴィコまたデ・サンクティス等の伝統によって歴史の理論の確立を求めた。『一般芸術概念の上における歴史』(一八九三年)の論究は、クロォチェのそうした青年時代の一応の結論となり、またさらに新しい出発点となった。一八九五年から一九〇〇年頃まで、当時三十歳前後のクロォチェは、社会主義の研究に、はじめて真の政治的情熱をよびさまされた」(『われ自身の批判のために』)。ラブリオラの真摯な思想上のたたかいが当時のクロォチェを深く打ったのであった。後にクロォチェは『イタリア史、一八七一—一九一五年』の自註に一八九〇年ラブリオがエンゲルスに送った書簡をひいていた。——ラブリオラは自から云った、「ながい年月のあいだたゆむことなく純粋

哲学にしたがってきた人間が、ほかでもない正にその哲学を通じていつか社会主義に到達し、実践的にそのプロパガンダに参加するにさえいたった、ということをわが国のひとびとの多くは理解することができるだろうか。わたくしは一人の学徒としてカントの実践哲学の頂上からヘェゲルの歴史哲学またヘルバルトの民族心理学を経て、必然的に、それらの思索の結論または発展として、社会主義の正しいことを確信するに至ったのである。実際上の人生及び生活の諸問題にたえずますます接するにつれ、そして従来支配している政治上の頽廃にいやな思いをかさねるにつれ、そして、労働者たちと親しくつきあうにしたがって、社会主義の確信が具体的とならざるを得なかった。」――ラブリオラの歩いた道は、そのままクロォチェのそれではなかったが、一九〇四年ラブリオラがその一生を終るや、クロォチェは真情をもってネクロログを書いた。事実クロォチェ自から社会主義についての真面目な研究なくして真の近代思想のないことを身をもって体験且つ実証し、なかにも一八九五年乃至一九〇〇年前後当時マルクス主義または史的唯物論について深く学ぶところあり、『史的唯物論とマルクス経済学』(英独仏訳等あり、邦訳、西宮氏・昭和四年・社会思想全集等)の各論究を発表した。「そのころのはげしい動きのなかから、わたくしに貴重なものがのこされた。人間的問題についての経験、そして、新しく生かされた哲学的精神、この二つがそれであった」(『われ自身の批判のために』)。社会主義が、一方では、人生の現実についての経験的態度をふかめ、他方では、哲学的精神を新しく生かした。この事実を、体験として直視し、すなおにその発展にしたがった点に、二十世紀思想の世界的また民衆的な代表者としてのク

ロォチェの哲学の成長があった。すでに、マルクス・エンゲルスの科学的業績の真面目な研究によって、人間の社会的また文化的精神的活動乃至表現の基礎としての現実的生産活動の意義を学んだクロォチェは、彼の哲学すなわち「精神の科学としての哲学」の第一部『美学』(一九〇〇年、第四版一九一二年、英独仏訳等あり、邦訳、長谷川誠也・大槻憲二両氏・世界大思想全集等)においても、「表現の科学としての」美学に彼の独創的の識見を展開した。

美しい生活、クロォチェにとっては、人間のよろこびまた人生の希望はそこにはじまり、そこにおわる。しかも、美、いな、すべては、自然にあたえられる単なる対象ではなく、活動によって実現されるものであるとする点において、クロォチェの哲学の原則は積極的である。そして積極的活動の主体は精神である、とする点において、それはあくまで理想主義または観念論の哲学であるが、精神と現実との一致を要求することにおいて、それは弁証法的観念論の理想主義である。そして、直観的表現または感覚が人間の現実的態度の第一歩であり、したがって、精神の第一段階であるとすることにおいて、クロォチェの理想主義は抽象また形式のそれではなく具体また内容のそれであり、現実主義に近く立つ。そして、最後に、直観を理論的活動の第一歩とし、また合理的理論なくして実践なしとする点において、クロォチェはあらゆる神秘主義をしりぞけ理性の立場を堅持するものである。

かくて、史的唯物論の研究と並行して美学または表現の科学において近代哲学の体系的再建を体験にもとづく「精神の科学としての哲学」の第一歩としてくわだてたクロォチェは、つづいて、

一方においては、一九〇二年『ラ・クリティカ』すなわち『批判』誌を創刊し、イタリアの新生のために、ひいては新しい世界の進歩のために、歴史及び文学及び哲学の「批判」の任務に就くとともに、他方においては彼自身の体系的思索の進行を一九〇五年『論理学』以下の公刊に発表した。『ラ・クリティカ』は、世界の哲学及び思想の進歩の明星となった。この『批判（ラ・クリティカ）』誌定期刊行の努力において、クロォチェは自から、文部大臣の地位においても得られなかった感じ、すなわち、全力をあげベストをつくすの満足の感じをもって仕事をすることができた。「わたくしは政治家たちはもちろん社会的にはたらく市民たちの前にひそかに自から赤面することがなくなった。』この『批判』においてクロォチェは自から一つの政治的な任務をはたすのだといった。けだし、ここに彼は「学者として、同時に、市民として」全力をつくしたのである。『批判（ラ・クリティカ）』誌は、一面では、いわゆる専門哲学の機関誌類が現実の人生を遊離しいわゆるアカデミイ主義に陥ったに対して、たえず現実の意識を強調し、他面では、いわゆる民衆のためと称する雑誌類が原則もなく方法もなく現実に追随し時流に便乗したに対してあくまで哲学また学問の本分よりする精密な批判の立場をまもり、まれに見る自立の精神を発揮した。かくて、『批判（ラ・クリティカ）』創刊以来三十八年、そのあいだに、ひさしく共に学問に献身しこの『批判（ラ・クリティカ）』誌の協力者の一人でもあったヂョヴンニ・ヂェンティレ等が時流に誘われ学問の自立をすててファシズムに屈し「行動的理想主義（イデアリスモ・アットウアレ）」などという名の下に非合理主義（イルラチオナリスモ）に陥り理性の立場から退却するに至ったあとも、いな、最後まで、クロォチェはたゆむことなく学問の自立すなわち方法の純潔をまもり、『批判』の理性をまもり、

実践と理論との一致を主張するとともに、あくまで、実践と理論との混同をしりぞけた。この『ラ・クリティカ』誌におけるクロォチェについては、後にまた見るところもあろう。

クロォチェが「その精神の科学としての哲学」においてまずその第一部『表現の科学としての美学』に出発し、つづいてその第二部『純粋の概念の科学として論理学』（一九〇五年、英訳等あり）にうつり、この間に『ヘエゲル哲学における生けるものと死せるもの』（一九〇六年、英独訳等あり、邦訳、高見沢氏・甲子社、吉岡氏・批評社）等のヘエゲル研究をも行いつつ、さらにその第三部『実践の哲学、経済及び倫理』（一九〇八年）に進んだのも、いわゆるドイツ流の官僚主義の哲学者どもが外面的に体系の形式を整えさえすればえらいように思っているなどとは全くちがって、実に生活の原則をあくまで深くあくまではっきりと確立し、且つその原則を人生の各方面における必要にして充分なる展開にごまかすことなく帰結正しく実証しようという内的の要求のあらわれであった。

いったい、何をか体系という。認識論乃至論理学及び倫理学及び美学などの哲学体系の書の著者が必ずしも体系的思想家ではない。クロォチェは体系という概念が何か外形的にきまった形式をみたすことのように考えられている場合が多いことを指摘し、そうした考えかたをしりぞけ、体系をもつということよりも体系的に思索することに意義があるとしてもいた。えらそうな大言壮語またむつかしい長談義でかためた体系などというものも、それで人を見下して俸給をもらったりするひとびとには役に立っても、民衆には何のねうちもない。「いわゆるドイツ的な神秘的

な難解さなどというものは、それをわかりにくいと思う民衆のほうが未熟であるからなどではなく、そうした体系そのものが実は自から内的に何も解決し得てはいないのでむりやりにこしらえあげたものであるからなのである。」ひさしくドイツ哲学を研究したクロォチェがその結果そう断言している。思想家だとか精神家だと称してえらそうなことをいっている人が、外面に信念を云々しながら内心に何の原則の確信があるわけでなく、自己または自己一派の栄達ぐらいしか考えていないのもある。だから、原則といっても人生の現実を無視してむりに押し立てたものであったり、したがって外面的にそれを固執するだけで内的には自から矛盾動揺したり、時流によって強がっているにすぎなかったりする。アメリカの新聞売子のなかには、「ぼくはハアスト系の新聞は売りません」という見識があり原則がある少年がいるそうだが、どこかの哲学者また思想家精神家などというひとびとは、そうした新聞売子に恥じないか。原則なくして何の思想、何の体系ぞや。哲学また思想が体系的たるを要するというのは、民衆にとって学問にとって、人生の現実から生れた原則の確信がなければならぬということなのである。体系的思想家とは、第一に、原則ある思想家ということである。自主的の原則なき思想家は思想家ではなく、まして真の体系的思想家ではない。そしてこの原則とは人生の現実から得られたものでなくてはならない。人生の現実を無視した原則では、外面はいかによさそうな原則でも人の内心において確信されることができぬからである。体系的思想家とは、第二に、その原則を人生の必要にして充分なる各方面にごまかすことなく、いつも現実的に徹底させることのできるような原則をもっている思想家と

いうことである。哲学や思想ではえらそうなことをいっていても、民衆とか女性とかいうことになるとはなはだ低級なことを考え、市民ならあえていさぎよしとしないようなことを平気でやっているものがある。民衆の指導者などといって実は権力を濫用したり自分の家庭では細君を奴隷のようにしている者がなければ幸である。戦争と平和との区別がつかなかったり、政治と文学を混同したり、善と悪との差別を失ったり、干渉の害がわからなかったりするのは、真の体系的思索を知らないからである。第三に、原則あり、帰結をごまかさない体系的思索にしてはじめて、各部分を圧倒する空虚な外面的な全体でなく各部分の自立を基礎とする十全なる全体について、また過去現在に執着しまた過去現在を無視する将来でなく過去現在の必然的発展としての将来について、根拠あるみとおしをもつことができる。原則（プリンチピエル）あり、帰結（コンセクエント）あり、みとおし（ペルスペクティブ）ある、体系的思索とは、かくのごときものをいうのであり、かくのごとき体系的思索にしてはじめて人生の現実に対し得るのである。クロォチェはかくの如き体系的思索をもとめるのであり、そのゆえに彼は学界のみならず、民衆の支持をうけるのであり、事実、彼の如く、原則あり、帰結あり、みとおしある哲学者は、現代にも、まれである。

　クロォチェの思索の原則は精神である。これは彼が彼の哲学の体系を「精神の科学としての哲学」の体系としていることからもただちに云い得ることである。しかし、クロォチェのいう精神とは、現実のまつただなかに真理をもとめる歴史的弁証法的意志ということである。だから、クロォチェの思索の原則はあくまで普遍的理性の認識である。クロォチェの概念的認識（論理学）

は、直観または表現（美学）を前提とし、すなわちさらにさかのぼれば現実を前提とし、且つ、自から実践（経済及び倫理）の前提をなすものであるから、それはいわゆる概念のための概念のような抽象また形式主義に陥ることがない。と同時に、現実は理論と一致せねばならず、いいかえれば、現実は理論的に理解されるときにのみ確実であるから、そして、直観というものも直観的認識にほかならないし、そして、認識を前提とせずして真の実践はあり得ないのであるから、クロォチェがいずこにおいても非合理主義また理論を軽視する行動主義などというものは支持されることはできないとするのは、その理由がある。

「論理的思考は直観を前提とする」とはクロォチェの『純粋概念の科学としての論理学』の第一語であり、直観的認識を前提とする概念的認識すなわち理論は実践にとって欠くべからざる前提である、とはその結語である。クロォチェの論理学はいわゆる形式論理学ではなく、従来学校などで教えられている形式論理学及びそれらの教科書的論理学をクロォチェは学問また科学としては認めない。それらは技術的練習にすぎないからである。クロォチェの論理学は人生の論理的整理である。この論理学において、クロォチェが、意識的人生の統一にもとづく必要にして充分なる差別は理論的精神の二段階、すなわち、一、直観的認識、および、二、思考的認識、と、実践的精神の二段階、すなわち、一、経済的行動、および、二、倫理的行動、この四段階のそれにつきる、としているのは注目に値する。この意味は、前にクロォチェの休系について見るところもあったし、彼にまたそれぞれ考えるところもあろうが、クロォチェはこの四段階の差別が必然に

して偶然にあらざる所以を論証している。これらの四段階を差別することは必要であり、これら四段階のほかに何等かを差別する必要はないのである。美に対する醜、真に対する偽、善に対する悪、それらの弁証法的「対立」のうえに、以上の四段階の「差別」を認めることの必要を指摘したことにおいて、クロォチェはヘエゲル哲学を批判的に一歩前進させたといわれる。ここにおいてはじめて、経済と道徳とはあくまで「差別」さるべきものであって、両者は対立するものではないことも明かにされたものである。なお、クロォチェがその論理学において、個的判断と普遍的判断とを段階的関係において解明しているのも注目される。単なる個的判断というものも、単なる普遍的判断というものもないのである。両者は「上昇」と「下降」との関係において必然的に統一されるのである。さらに、すすんで、クロォチェは、哲学と歴史との一致の論理的根拠をあげる。歴史的判断の主語は直観であるが、その述語は概念である。したがって、この綜合たる歴史的判断において、直観的要素と論理的要素とは統一される。真理は現実の認識であり、現実は歴史であるから、歴史は理論的精神の最高の段階をなすわけである。哲学と歴史との一致は、クロォチェの人生観世界観の結論であり、したがって彼の「精神の科学としての哲学」の体系は、一、『表現の科学としての美学』、二、『純粋概念の科学としての論理学』、三、『実践の哲学、経済及び倫理』、これらの三部をへて最後に、第四に『歴史叙述の理論及び歴史』(一九一二―三年、一九一六年、邦訳、羽仁五郎。大正十五年・岩波書店)に至ったのであるが、このクロォチェの思想の中でも最も深い意味のある歴史と哲学との一致の理論は、かく、論理的にも実証されたのであ

った。なお、クロォチェがその論理学の最後の部分に、「誤謬の現象論」を展開しているところにも、彼の思想のまじめなすがたを見ることができる。判断の正否の問題は、従来また普通の哲学また認識論また論理学の講義や教科書では先験的または形式的に取扱われているが、クロォチェは、そうした取扱によって誤謬の問題が現実的に解決されるとは思わない。諸君も同感であろう。普通の形式論理学であつかわれているような「誤謬」が実際の人生に問題になるのではないのである。クロォチェは、われわれの人生に問題となる誤謬は、理論の範囲内にあるのではなく、実践の範囲に関係しておこるのであることを指摘している。誤謬は理論的精神の現象形式として実在するのではなく、実践的精神の所産として存在するのである。謬る人は、思索から行動にうつる。しかも、従来、誤謬の問題が実践の問題とされた場合には、それがただちに道徳の問題とされたのが、普通であったに対し、ここでも、クロォチェは、倫理的行動とは真理の把握を前提とするのであるから、いわゆる理論的誤謬は単なる経済的動作にほかならないのであることを、指摘する。誤謬が道徳の問題ではなく、経済の問題であることを明かにしたクロォチェの理論の意義は大であり、新鮮であり、深刻である。しかして、誤謬は真の反対であり、この両者は弁証法的関係にあるから、真実の意味の誤謬すなわち真理への意志を前提とする誤謬は、一層高度の真理への進歩の刺戟また動機であることを論理的に実証しているクロォチェの善意にも諸君は敬服するだろう。現実におこる真実の意味の誤謬は、一層高度の真理への向上すなわち進歩への動機であり、現実の歴史的進歩を人生及び哲学また思想の原則的基礎としまたみとおしとすることに

よってのみ、誤謬の問題が、具体的に解決されるということを発見するクロォチェの態度には、悪戦苦闘の中の味方をはげまし、敵を味方とする哲学者の真摯がある。クロォチェの「誤謬」論の主要論証は、以上のような三点すなわち、一、理論的誤謬が実践的性質のものであること、二、理論的誤謬は実践の問題ではあるが、倫理の問題ではなく、経済の問題であること、三、真理への意志の存するかぎり誤謬は進歩の動機であること、これらの三点にあるが、現実の誤謬についてのかくの如き具体的論理的取扱において、クロォチェは近代哲学にいままで見られなかった現実的なそしてまじめな新しい論理学を展開したのである。そして、現実は歴史であり、歴史は哲学であることを実証するクロォチェ哲学の命題は、ここにも積極的に徹底されていたのであった。クロォチェの論理学はクロォチェが如何に人生の現実にまじめな原則ある思想家であるかを示していることにおいて、すべての人に親しまれ得る。彼の理論的精神の強さ、如何なる場合にも非理論をしりぞけ、理論の原則、その差別、その現実性、そのみとおしを実証する彼の理論的精神に、諸君は共鳴せないであろうか。

かくの如きクロォチェの思想なればこそ、それは、論理学すなわち『純粋概念の科学としての論理学』から、さかのぼって美学すなわち『表現の科学としての美学』へ、および、実践の領域にうつって『実践の哲学、経済及び倫理』へ、の体系的展開において、更にその美学から『ゲエテ』(一九〇六年、邦訳、早乙女氏・昭和十年)また『アリオスト、シェクスピア及びコルネイユ』(一九一二年)、『ダンテ』(一九二〇年、英訳等あり、邦訳、岩崎昶氏・大正十三年雑誌『講座』)、『詩

と非詩』（一九二四年）等への具体化において、また論理学から『ヘエゲル哲学における生けるものの死せるもの』（一九〇六年）また『ヂアムバッティスタ・ヴィコの哲学』（一九一一年、英訳等あり、邦訳、青木氏・世界大思想全集）等への反省において、またその論理学実践哲学から『歴史叙述の理論及び歴史』（一九一二―三年）または『クリティカ』誌等における人間学的研究『フランメンティ・ディ・エティカ』（一九二一年、英訳等あり、邦訳、薄田氏・昭和二年・文明協会）また時事的論策論集『パヂネ・スパルセ』（一九一九年）、その中から『一哲学者の世界大戦中の覚書』（ドイツ訳版、一九二二年）、また『政治の基礎』（一九二四年）、『政治的生活についての倫理的考察』（一九二八年）、また『イタリア史、一八七一―一九一五』（一九二七年）、『十九世紀ヨオロッパ史』（一九三一年）、そして最近における『思想としての、また、行動としての、歴史』（一九三八年）等への発展において、つねにますます活潑に、二十世紀思想の本分を発揮し得たのであった。

人間の精神の最も原始的なありかたは直観であるとするクロォチェの哲学の体系的意義、および、その最も原始的な直観さえも一の認識であり直観的認識とみなさるべきものであるとするクロォチェの理論的精神の強さ、それらについて、われわれは既に学ぶところがあった。クロォチェの美学すなわち『表現の科学としての美学』は、この人間の精神の最も原始的なありかたである直観の本質を解明し、この人間の最も原始的な精神たる直観も、一つの認識であり、直観的認識または表現とみなさるべきであるとすることにおいて、人間は最も原始的には感情で動くとか、

神秘に生きるとか、直観は表現たる前に感受であるとかいうような受身的官能主義とか神秘主義とか非合理主義などの存立の余地をなからしめている。クロォチェが彼と同時代の同国人ではあるがダンヌンツィオの文学乃至思想の不健全をはやくから指摘していたのも、クロォチェの美学的哲学的確信がダンヌンツィオの官能主義また衝動的行動主義を原則的にも具体的にも支持にあたいせないとせざるを得なかったからであった。

直観がつねに思考の前提であり、思考的認識がつねに実践的行動の前提であり、経済的行動がつねに倫理的行動の前提であることを解明したクロォチェの『実践哲学』すなわち『経済及び倫理としての実践の哲学』の体系的意義、またそれがクロォチェの思索体験のいわば自伝的叙述をなしていたともいえることについても、すでに諸君は知っている。クロォチェの『実践の哲学』一巻は、おそらく、この種の哲学書のなかで、もっとも多くのひとびとにしたしまれることのできる書物である。わたくし自身、いつもクロォチェの著書をよんだとき、ほかのどんなことよりもなによりも、おのずから人生に対する確信をたかめられることを感じて、感謝するのであるが、なかでも、彼の『美学』及び『論理学』及び『実践哲学』の体系の中ではこの『実践の哲学』に最も深い親しみをおぼえるのである。『実践の哲学』の第一篇第一章第一節において、クロォチェが実践を「精神の形式」として居るのは、理想主義の立場の主張であるばかりでなく、それは同第二節において展開されるように、人間的活動の基本的要素に理論と実践との二つの主要素のほかに第三の要素として「感情」を認めようとする説に対する力強い批判をふくんでも居る。クロォ

チェは、精神の基本的な従って自立的な原則としては理論と実践との二つを認め得るのみであり、必要にして充分なる原則的差別はこの二つに尽きることを明かにし、実践が精神の実現であるということは、思想の実現であって、感情の実現などと理解されることはできないとし、感情主義や非合理主義や神秘主義や衝動的行動主義の成り立ち得ない理由を論証している。実践といえば、すぐ行動と考え、理窟はどうでも行動だとか、行動には神秘があるとか、人は感情によって行動するとか、衝動は絶対だとかいうような考え方があるが、クロォチェがそれらの考え方の不健全を指摘し、行動は何でもかまわぬ行動や神秘的行動や感情的行動や衝動的行動ではありえないので、必ずつねに精神的行動すなわち思想的行動すなわち理性的行動でなければならぬとしている論証には、すべての人をうなずかせるまじめさがある。けだし、『実践の哲学』の第一篇第一章第三節において解明されるように、実践はかならず理論を前提とするのである。心理学的には、あるいは、単なる事実としては、必ずしもそうでないようにも見え、実践が理論を前提とする場合もせぬ場合もあるようにも見えるが、哲学的には、いかなる無意識的行動もつねにかならずそれに相応した理論を前提としていることが、あきらかにされるのである。単に主観的には無意識であることも意識的であることもあろうが、客観的にはすべての行動は意識を前提としているので、したがって主観と客観との綜合における真の事実としては、意識なくして真の行動なく、理論なくして真の実践はないのである。理論あり、しかして後に実践あり、とするクロォチェの哲学的断定は、だから、理論が完全にならなければ何の実践にもうつることができないなどと

いうことを主張したものではなく、理論なくして行動し得るなどという主張に対して反対するのである。だから、クロォチェの主張は、まじめな行動はかならず理論をもっておらねばならず、その理論はいかに不完全でも、そのときとしてはまじめに充分考えられた理論を前提としてはじめてまじめなる行動があるのであり、そしていかに不完全でも理論が行動にうつされるので、その理論の不完全さもあらわされることもでき、誤謬が誤謬としてはっきりされることもでき、それによっていっそう完全にちかづいた理論が生れ、またそれによっていっそうしっかりした行動も出来るのであり、こうして理論を前提とした実践においてはじめて進歩が行われることもできるのである事情を明かにする。クロォチェは閉鎖されたる体系にも反対する。すなわち、現実にこれで完全だという理論があり得るはずもなく、完全な理論がなければ行動できないなどということはないのである。これで完全だという理論を前提とするこれで完全だという行動を主張する立場や、理論なくして行動ありとする立場などが、全体主義とか行動主義とかいう名の下に主張されることがあるが、そういう立場においては進歩ということはできないのである。現実においたがいに不完全なものを自分だけ完全であるかのようにおしつける立場や、問答無用で行動する立場などによっては、歴史的進歩は実現されないのである。実践的判断は歴史的判断であらねばならず、かくあるときにのみ進歩が行われ得るのである（同上第六節）。理論と実践とのこうした原則を承認するときにのみ、法律の有益性及びその限界もあやまりなく理解されることができるのである。よく誤解されるように法律または法は原則的意味における法則ではなく、技術的意味に

おいて記述されたる規則である。法律は絶対的に自立するのではなく、絶対的に自立するのは理論と実践との弁証法的関係すなわち経済及び倫理としての実践の哲学であり、理論と実践との関係の原則の絶対的自立の下に、法は相対的に成立するのである。勝手な法律の改廃によって法の進化また進歩が行われるのではなく、理論と実践との弁証法的関係の歴史的進歩の必然に従ってのみ法の進歩も可能にされるのであり、それらを貫いて合法的精神がまもられねばならぬということも、法の形式は絶対的自立的のものではないので、実践は理論を前提とせねばならぬという弁証法的原則の絶対的自立の下にのみ、合法的精神はその意義を発揮し得るのである（同上第七節）。さて、理論が実践の前提を成すことは、理論から実践にうつることとなるが、ここにおいて理論が実践に溺れてしまっては、実践の前提としての理論はなくなってしまうのである。哲学は経験に対していちいち指図すべきではなく、また単なる経験をあつめて決して哲学を得るのではない。哲学は経験に対して原則をあたえ得るのみであり、この限界にとどまり客観的たるかぎり、哲学はまじめであり得、有益であり得、権威をもち得、力強くあり得るので、この限界をこえることは哲学が自からをほろぼすこととなるのである。経験は哲学を実証し得るのみであり、そのかぎりにおいて貴いのであり、経験からただちに一般論をひき出すことはできないことであり、強いてそれを行えば経験の経験としての価値をだめにしてしまうし、そうした一般論に何の価値もないこともいうまでもない。哲学が経験の領域にまで入って行くことは、経験が自ら哲学を僭称することと同様に、哲学にも経験にも自他あいほろぼすことにしかならぬ。哲学者が経験的問

題に干渉することは、決してその経験的問題の実際の解決にみちびくことにはならずしてただ外形的にあるいは抽象的に解決したように見せることになるだけで、そうされたことにより実際は問題は解消させられただけで、決して解決されたことにはならぬ。哲学は一般的解決をなし得るが、個別的解決をなし得ず、またなすべきでなく、しかして、経験的問題は個別的に解決されねばならないからである。しかも、抽象的解消ならまだよいが、哲学が経験的問題に干渉し、しかも強いてこれを哲学的に解決しようとするときは、もっと不幸なことがおこる。すなわち、そのときには哲学が自から党派的となり、客観的原則の学としての哲学はそこに自から存立を危くされることとなるからである。哲学と経験とはたがいに限界をまもることにより健全なる協力においてたがいに繁栄することができるのである（同上第八節）。哲学は党派的たるべからず、とするクロォチェの断定に、諸君はふかく示唆されるところがあるだろう。党派的たるべきでないということは、如何なる意味でも原則をもたないということではない。むしろ、クロォチェは、哲学にむかって、あくまで哲学的原則をまもるべきことを要求する。その意味では、クロォチェは哲学があくまで哲学の党派をかたくまもり、非哲学の党派に対して断乎として戦うべきことを要求するのである。そして、まさにそのために、というのは、哲学が哲学の原則をまもるために哲学は決して経験に干渉すべきでなく、決して経験における党派に従属して哲学の客観的立場を危くすべきではない、とクロォチェは断定しているのである。哲学は経験的問題において党派的となってはならぬ、とするクロォチェは、哲学をしてあくまで哲学的原則をまもり、偽哲学に対して

あくまで哲学の党派をまもり、非理性に対してあくまで理性の立場をまもり、反動と進歩とをあくまで哲学的に弁別せしめんがために、血を吐くようなおもいをもってこの言をなしているのであろう。

クロォチェが、「実践的行動性をその諸関係において」論じた『実践の哲学』の第一篇第一章から、すすんでその第二章において、「実践的行動性をその弁証法的性質において」論じているところ、なかにも、自由と必然との関係を論じて勝手主義をしりぞけるとともに宿命論の不合理を指摘し、不自由に対する自由また発展と進歩とのための自由の意義を論じているところ、またその第三章において、「理論的なるものと実践的なるものとの統一」を論じているところ、なかにも、生が思索を規定することを明かにし、そこに歴史的なものと永遠的なものとの関係の成立を解明し、生また精神また理想また理性の立場を確立しているところ、これらもまたいずれも深刻の現実に対して精密な研究を遂げた結果をのべた明朗の所信ならざるはない。

「実践の哲学」第二篇は第一篇の総論に対する各論であり、実践の形式としては経済と倫理との二形式を認むべく、必要にして充分なる差別はこの二形式に尽き、第三の形式を認むる必要のないことがその第一章第一節に論証され、ついで、倫理的形式の自立を否認する考え方の批判（同上第二節）、および、経済的形式の自立を否認する考え方の批判（同第三節）が行われる。倫理の自立を説いたものは従来の哲学にも決してまれでないが、経済の自立を論じてクロォチェの如く確実の証明を行ったものは近代哲学にも未だ多く見得なかったところだ。経済的行動はそれが経

済的に有益であるか否かによって評価さるべきである。倫理は経済を前提とするから、倫理的行為は必らず経済的であらねばならず、いいかえれば、経済的に妥当な行為でなければ、倫理的にも妥当とされることはできず、すなわち、不経済な行為が倫理的善となることはできないが、経済は倫理の前提であるから、経済的行為は倫理以前であるので、これを倫理的に善とか悪とかいうことはできないのである。経済を道徳と混同し、経済行為を道徳的に是非したり、甚しきは経済的行動に道徳的圧迫を加えようとしたりする考え方があるが、こうした考え方は精密を欠き、経済的発展を危険にさらすものであることを哲学的に指摘し論証したことは、クロォチェの卓見である。最近では、道徳のみならず政治をして経済に干渉させようとする考え方さえあるが、かくの如きは道徳また政治また経済の各の自立をやぶり、それら相互の真の協力を不可能ならしめ、結局自他の発展を害するにすぎぬことを、クロォチェはすでに哲学的に明かにしていたのである(同上第三・四節等)。経済は実践の一形式にすぎないから、その自立には自から限界があるが、その限界をまもる以上は、その自立は完全に承認されねばならないのである。この限界が合理的に認識されないと、経済の哲学といわゆる経済の科学との混同などが起るが、経済の限界を明かにしてあくまで経済の自立をまもることを、実践の哲学は要求するのである(同上第五・六節。)経済と倫理とはおのおの自立をたもちつつ、前者の自立を前提として後者の自立があり、前者が個別的であるに対して後者は普遍的として、この両者の差別と統一とに実践の問題はつきる。法律また法の如きも、法が自立して経済を左右し得るというような考え方は幻想であって、経済が

自立し、この経済の自立によって法律が成立するのであり、法律をして経済に干渉せしめるようなことは事実としてできることではなく、強いてこれを行わしむればその結果は法律をも経済をも害することとなる。法の権威はそれ自身成立するのではなく、不経済なる法は権威をもつことはできないことからも知られるように、経済の自立によってこそ法の権威も認められるのであり、更にさかのぼっていえば、法の権威は実践の哲学的原則によってこそ存立するのである。宗教の確信及び普遍性も、その本質は倫理的確信及び倫理的普遍性であり、更にさかのぼれば、実践哲学のそれであり、したがって理論哲学を前提とせねばならぬことも、健全なる思索の自から明かにし得るところであろう。経済の自立を前提とする倫理の自立の原則をめぐって、実践の最高問題につき、クロォチェは、あくまで人生の現実に即して精密の法則を研究する。その際、卑俗な考え方がどうかすると法律的な法すなわち個別的な規則と実践の哲学の哲学的な法則すなわち普遍的な原則とを混同することの不正確も批判される。かくて、あくまで実践の哲学の哲学的原則の最高の意義をまもり、その下に実践の各領域のそれぞれの自立をまっとうすべきことが、動かすべからざる精密をもって論証される(以上第二篇第二章及び第三篇)。クロォチェの『実践の哲学』の「結論」は全哲学の体系的結論をなしている。しかも、そこに、クロォチェが理性の徹底についてのべている所信には、あらゆる人を打たねばやまぬものがある。クロォチェは論証した、現実は理性の論理にもとづく思索によってつらぬかれ得ること、を。しかもあるひとびとは、思索によってつらぬかれ得る現実のほかになお神秘をもとめ、論理の上に超論理があり、合理以上

の非合理があると考えねば満足せぬようにみえる。はっきりしないもののほうが、はっきりしたものよりも力強いかのように、また、美しいかのように考えられるのだろう。しかし、とクロォチェは結論する、「それらのひとびとは一の心理的幻想におぼれているのである。それはもはや哲学的思索ではなく、積極的思索でもない。それは、あたかも、あらゆる現実に存在する芸術品をはるかに下に蔑視するようなそれほど高い芸術なるものを夢みるひとが、この幻想のゆえに自からは一の詩を創作することもできぬに似ている。此等のあまりに洗煉された詩人たちは無能力である。そのように、かの理性の決定に満足せぬ哲学者たちも、自から無能力たらざるを得ない。現実また生が無限にして尽すべからざるは、それが思索また理性によってつらぬかれることができないからではなく、却って正に理性また思索が現実また生を、現実乃至生にひとしく無限にして尽すべからざる理性乃至思索の力をもってつらぬくからなのである。」その際、クロォチェはその哲学体系を一の閉鎖されたる体系として主張するのではない。「生そのものがいつも決して終結的でないのだから、いかなる哲学体系も終結的たることはできない。」完結せる哲学体系というものがあれば、それはうそである。クロォチェがその哲学的体系を完結せるものとして主張せぬのは、単なる個人的謙遜ではない。それは無限に前進する生の現実にたいする哲学体系の客観的謙遜である。だから、そこには自から、また、その無限に前進する生の現実をつらぬいて行こうとする理性の無限の前進の確信がふくまれている。かくて、クロォチェの哲学は、「歴史的に与えられた一群の問題を解決しつつ、同時に、新たなる問題すなわち新しい体系の提起の条件を

準備するところの」真の哲学体系として、「その探求のおわりに、それ以上の探求のいまはまだ決定され得ない線をみとおすところの」生ける哲学として、真実に生きるために思索しようとするすべてのひとびとの為に、その「労働用具」として、思索の武器として、その手ににぎられるのである。

かくの如き体系を、クロォチェは、さらに、あるいは『歴史叙述の理論及び歴史』に、あるいは『戦時論文』、あるいは『イタリア史、一八七一―一九一五年』また『十九世紀ヨオロッパ史』等に、自から発展させたのである。

『歴史叙述の理論及び歴史』はわたくし自身これをわが国語に翻訳刊行したのであったが、この書に展開されたクロォチェの思想がどれほどわたくしの生活及び学問に深い影響を与えたかを、わたくしは感謝をもって記さねばならぬ。クロォチェは彼の哲学的苦闘、なかにもあの『実践の哲学』をもって「人生に対する信念」に到達したと記していたが、わたくし自身そのクロォチェの『歴史叙述の理論及び歴史』によって、人生の希望を得たといっても過言でないだろう。わたくしはこの『歴史叙述の理論及び歴史』によって、すべての歴史は現代の歴史であることを教えられたばかりでなく、また、あらゆる偽歴史的な考え方を自己批判することを学んだばかりでなく、また、哲学または思想との一致の真の意義を知らしめられたばかりでなく、実に、歴史的に考え歴史的に生き、歴史に希望をもつよろこびを与えられたのであった。そして、わたくしは、ただわたくしの恩を謝するためばかりでなく、このよろこびすなわち真の歴史の理性を信ずるも

ののよろこびを読者諸君とわかたんがために、この書を訳したのであった。「わたくしの到達した結論、すなわち、歴史と哲学との一致の確信は、わたくしを、わたくし自身に対する懐疑から、そしてまた、人間が真を知る能力に対する懐疑から、決定的に解放するに役立った。固定した真理、歴史の外に立つ真理の概念が立てられるとき、ただちに懐疑が必ず避けがたく、またうちかちがたく起って来る。ただ歴史としての真理のみが、現代の傲慢をやわらげ、未来の希望を与える」（『われ自身の批判のために』）、とクロォチェの云ったところは、またわたくしの、また諸君の云いたいとおもうところではないだろうか。

「歴史は至厳なる審判者である。」（クロォチェ『世界大戦に対する一哲学者の覚書』中の一九一五年十月一日の会見記）。欧洲大戦は、それをひきおこしたひとびとまたそれを自己に有利にみちびこうとしたひとびとの意図とは反対の一大試煉となってしまった。クロォチェは彼の哲学体系をもって、「戦争にともなわれたうそに対して」たたかわねばならなかつた（『われ自身の批判のために』）。しかし、何がうそで、何がほんとうであるか。クロォチェの『戦時論文』は戦争の混乱のまっただなかに立った哲学者の良心的なるたたかいの記録として、当時及び後世に恥じざるものである。いな、多くのひとびとが恥をわすれたとき、クロォチェが、なお恥を知る真人間としてはたらき得たのは、彼の哲学が原則あり、帰結あり、みとおしある哲学であったからであろう。大戦勃発の一九一四年の十月十三日のインタアヴュウに、クロォチェは、「民族の差別を信ずるか」といった問には微笑と沈黙とをもって答えた。そして最後に一言した、「諸君にす

すめたい、——最大の危険の瞬間にも『あたま』のはたらきを失ってしまうほど狼狽せぬことを、」と。同年十二月、「おちついてものを考える忍耐を失った人たちの小理窟によって戦争がひき起されるのを恐れよ。」一九一五年一月、「自からを傷つけるような武器をとるな。」同月、「イタリア国民主義者等が、政治上反対の立場に立つひとびとを被疑者視したり人身攻撃を行ったりしているのも、最悪の武器をつかうものといわねばならぬ。けだし、それらは却って彼等自身の弱さを暴露してしまうからである。」同年五月、「国民から自由の感覚を奪い人格の意識を失わせ、これを一群の家畜のように取扱うというようなことは、真に国を愛するもののよく為し得るところでない。」同月『ラ・クリティカ』第十二号論説、『イタリアの参戦と学者の義務』。「いたずらなる大言壮語は、戦争を口実として実は物を考えないでごまかして行く懶惰への衝動の誘惑にまけた者の言葉にすぎぬ。彼等は、それでなくても、ふだんから精確に思索することをめんどくさがり、根も葉もないことをいってうまいめしにありつきたいという慾望の誘惑におおっぴらに身をまかせることができないかと考えていたのだ。そんなことに戦争を口実にされ、空想を横行させて精確な思索を怠ることは許さるべきでない。われわれは、そんな迷想家等とともに、てがるに、戦争の後には新しい芸術、新しい科学、新しい哲学、新しい歴史がはじまるだろうなどという空な期待をもって自から安んじていることはできぬ。新しい文化というものが、おくりもののように天から落ちて来ることのできるものでないことも、軍事的勝利及び政治的変更の機械的結果として得られるものでもないことも、われわれはあまりによく知っている。ただいつもたえず勤労を

つづける思想の不断の働らきがあってこそ新しい結果も得られるのだ。またわれわれは、最近多くの著名な学者達すらが学問的概念をあれこれの一時の政治的立場の擁護や攻撃に援用しているのをも、喜ぶべきことと思わない。祖国に対する義務は真理に対する義務の中にこそ成立するのである。いかなる言葉も行為も、それが理性を棄て真理をまげたものであったなら、それらはすべて真に祖国の光栄にささげられた奉仕ではあり得ず、むしろ祖国に汚点をつけるものである。祖国はその学者達の真実をまもって屈せぬ精神に期待するのである。婦人の堕落と同様に学者の阿諛によって祖国は強められるのではなく弱められるのである。」同月、「ダンヌンツィオは詩人ではなくなった。カルドゥッツィは真の詩人である。カルドゥッツィの愛国勇武の理想は何等強いられるところなく自から侵略また抑圧の精神に対する嫌悪の感情にむすばれている。」同年十二月、「真の現実主義政策とは何ぞや。それは同時に理想的たるときにのみ、真に現実的たり得るのだ。」同月、「トライチケが云った、——真の歴史は、ドイツ的とかフランス的とかイギリス的とかの立場から書かれ得るものではなく、ただ世界人類の立場からのみ、書かれ得るのである、——と。」同月、「相手を罵倒して何になる。」一九一六年二月、「昨日は昨日の流行の奴隷、今日は今日の流行の奴隷、時流の奴隷はつねに時流の奴隷。われわれは精神的独立に立つがゆえに、昨日にも今日にも奴隷根性にくみすることはできぬ。」同年五月、「わが国民は健全にして決意あり、興奮薬や刺戟剤などを必要としていない。要求されてもいない興奮薬や刺戟剤がさかんに提供されるのは、それこそむしろ不信と疑惑とをいだかせる。」同月、「勝利のためにはすべてはゆるされる。たし

かに、そうだ。しかし、その勝利とは単なる瞬間の勝利であってよいはずはなく、無茶な方法で得られた勝利、したがってたちまちまた失われ、しばらくすると当然自から復讐されるような勝利であってよいはずはなく、真の勝利であらねばならぬ。そのゆえにこそ、国際法その他の国際的約束はまもらねばならないのである。やむにやまれぬとはいえ約束を無視するのは、危険なやりかたである。それは、現在の病気を治療し得るからといって、後に新しい危険の病状をひきおこすような手術や処方をあえてする医家に似ている。どうかすると約束をやぶるような国を、その後だれが信頼するだろう。まかされた敵に屈辱的な条件を強いるということも、勝利を恒久にする所以ではないのである。」同年同月、「一つの説から解放されるには、その説が論理的に成立せぬことを証明するよりほかのみちはない。」「学問を政治的顧慮に隷属させる学者はたのむに足りぬ。かれらは権力のかげにかくれてそれぞれの方法や学説を誇ったりやっつけたりするのだから、権力を握っているものがかわったり国際事情が変化したりすれば、何の苦労もなくあっさりとまたその見解を変えるのだから。」同年五月―九月、「戦に勝つために祖国のためには学問上の確信も犠牲にせねばならぬときがある、などという人がある。こういう人は自分で何をいっているのかわかっていないのだろう、もしわかったら、かれらは、かれら自から祖国と真理とを対立関係におくことにより祖国の衰微破滅を宣告しているものであることに気がつくだろう。真理に対してたたかうものは、必然的に自からたおれるからである。」同年十二月、「国粋とか民族的類明とかいうが、近親結婚はいかに好ましいように見えひきつけられるところがあっても危険なこ

とがあり、遠くはなれているもののあいだの結婚のほうが力強い生活力ある子孫をもたらすことがあることも考えてみる必要がある。」一九一七年九月、「われわれの周囲、あの理性にかがやいた眼、あたたかい言葉、自由の計画、健全な精神にみちた笑、それらはどこへ行ってしまったのだ。それらの見られた時と現在とは深い淵でへだてられてでもしまったのか。」「学者が学問と政治と愛国主義とをまぜあわせたような文章を書いたりすることは、いとやすいことだが、それは何の益もなくむしろ有害なことだ。学者が萎縮したり精神的無為に陥ったりするのもこまるが、不健全な興奮に比すればまだ何もしないことのほうが害がない。よいことまた有益なことをつくり出さないということよりも、将来の収穫のいまだねむれる萌芽をも殺してしまうということのほうが、大なる禍であるからだ。」一九一八年六月、「学問の自立が失われることによって国家社会が失う力の貯蔵は、実は、穀物や鉄の貯蔵と同様に或はそれ以上に必要なものなのだ。それは真理を発掘し、真理を配給する力の貯蔵であるからだ。」同年同月、「真理をおそれよ。学問に従事するひとびとは、何よりもさきに、恐るるところなく真理を求め、真理を云え。けだし、あらゆる人生の行動のいずれもが危険であるという一般的意味のほかには如何なる『危険なる真理』なるものもないからである。ただ、真理は光明であり、光明は世界の生命である。」同年同月、「戦争によって何もかも一変するということはないのである。ダンヌンツィオおよび彼の模倣者たちは戦争以前にはデカダンの詩人であり頽廃の文学者であったばかりではなく、彼等が今度の戦争の賛美者となってもやはり文学上に彼等がデカダンであり頽廃文学者であることにはかわり

はないのである。けだし、爆弾を投げたり、航空機にのったり潜水艇ででかけたり、敵襲に参加したりするということ、そうしたことはすべていずれもそれだけでは決して一定の深い意味で人間の態度や感情や構想力をかえるものではなく、一般的に云えば、内心の人間性を変ずるものではないからである。」一九一八年十一月、「戦勝。真の勝利の歓喜は、荒れ狂うような運動において爆発するものではない。だからといって、心理学者たちが云ったりするように、よろこびは悲しみより強くない、などというのではない。よろこびが外見上に強烈でありえないということは、真のよろこびはその本質上おのずからまたその新しい情勢より生ずる問題また新しい義務についての深い思いあるいは沈思熟慮あるいは憂いをともなっておらねばならぬからである。何を祝うか。国民民衆はお祭り騒ぎを欲してはいない。そして同じおもいを、戦勝国も戦敗国も、深くしているのである。われらの聯合同盟各国もわれらの敵たりし各国も、全世界が、なお高潔の精神を存したかぎりでは、同じ心をもって、堪えがたき歴史の悲痛のまえに戦慄し、その歴史の将来のためにいのっているのである。」クロォチェの『世界大戦における一哲学者の覚書』または『戦時論文』は、かくのごとくはじまり、かくのごとくおわっていた。

クロォチェの最近の歴史家としての活動は、このようなクロォチェの哲学体系の、いな、このような彼の思索と体験との、究極的な発展の結果であった。『イタリア史、一八七一―一九一五年』（一九二七年）、そして『十九世紀ヨオロッパ史』（一九三二年）は、こういう意味において、クロォチェの哲学と歴史との一致、いな彼の哲学と実践との一致の具体的な表現である。

『イタリア史、一八七一―一九一五年』の第一章において、クロォチェは「それぞれの民族とか国民とかに特別の使命があるように云い、そうした使命のない民族国民は民族国民と呼ばれるにあたいせぬというようなことが、最近の流行であるが、そういうようなことに何か真面目な意味があるであろうか」と、彼の近代史的考察を開始する。何という大胆な、そしてまた何という精密な緒論であろう。諸君は如何に思うか。大言壮語にはじまり大言壮語におわり、現代の複雑な生活の現実に精確な基準を求める読者の要求にはなにものをも与えないいわゆる歴史著述の横行になやんでいる諸君の大部分は、沙漠にオアシスをみいだしたようにおもわないであろうか。「テオドル・モムゼンは言葉をはげましてクィンティノ・セルラに問うた」という、「何を君たちはロマにあってなさんとするか？　われわれ一同はそれをきかねば安心できぬ。ロマにあっては人は大宇宙的目標なきことあたわぬ」と。セルラは答えた、「ロマを中心としてイタリアのかかげる大宇宙的目標はほかでもない『学問』であり『科学』である」と。しかし、クロォチェは断言する、「イタリアの掲げるべきだというあれこれの使命なるもの、セルラのそれにせよその他のそれにせよ、それらを批判してみても、何の役にも立たない」しかし、「各民族国民なるものが特定の使命なるものをもつという思想そのものは、批判を必要とする」と。けだし、「現実には、諸民族諸国民は、個々の人間と同様に、ほかにいかなる使命をもつのでもなく、ただ、人間的に、すなわち人類の理想のために生きる使命をもつのみである。このただ一つの使命が時と周囲の事情によってどういうかたちではたされるかに変化があるのみである。このほかに、あ

る国民のみの使命とか他国とちがう使命などというものは、神話にすぎぬ。それらは、すべての神話と同じように、今日は正しく導くが如くであっても明日は道に迷うをまぬかれがたく、今日は人心を昂揚させても明日はそれを沈滞させないとはいえず、今日には益ありとも、明日には害をなすのである。あらかじめきめられたような特別な使命なるものによって事実を無視し否定しまたはあざむいては、精確な歴史的判断は得られないのである。確実な歴史的判断は、事実理解のうえにのみ求め得るのである。」『イタリア史、一八七一―一九一五年』をひらいて、先ずこの緒論に接するとき、クロォチェはますます健在なりの感をなさざるを得ぬ。現代の混乱が甚しければ甚しいほど、使命というような言葉にすがって、自信の喪失をごまかし、精確な判断を得られないのをぬりかくそうとせざるを得ぬもの、彼此みなしかりと云っても過言ではない。ひとりクロォチェはそうした空言にたよらず、事実の直視と理解とにより精確な歴史的判断によってのみ、この複雑の現代に認識と行動との具体的なる指針を得べし、として一歩も動じない。

神話をかかげることではなくして、現実を歴史的に明かにすることによって、現代にたいする指針を、原則的に、すなわち哲学的というのは学問的に、確かにする。そのためにクロォチェの『イタリア史一八七一―一九一五年』の全巻はささげられているのである。そのために、「一八七〇年以後のイタリアにおける政治的イデオロギイ及び歴史的現実」(第一章)を緒論とし、まず、近代イタリアの成立の時期(一八七一―一八八七年)を、各方面から、精確にいえば体系的または社会機構の分析にもとづいたその各部面から、「国家の構成および国民経済の発展(一八七一

三章)、および、「外交(一八七一―一八八七年)」(第四章)、さらにその上に、「思想および理念(一八七一―一九〇〇年)」(第五章)、と、下部構造から上部構造にわたって各層的に考察し、それから、それ以後の時期を、こんどは発展的に、「新しい理念およびその変化(一八九〇―一九〇〇年)」(第六章)、「クリスピの時期(一八八七―一八九六年)」(第七章)から「反動主義政府のこころみとそれに対して再び起って来た自由主義(一八九六―一九〇〇年)」(第八章)、「自由主義政府と経済的繁栄(一九〇一―一九一〇年)」(第九章)、「文化の繁栄と精神的運動(一九〇一―一九一四年)」(第十章)、しかるに「国内政策およびリビア戦争(一九一〇―一九一四年)」(第十一章)から「中立の時期」そしてついに「世界大戦参加(一九一四―一九一五年)」(第十二章)、と、近代より現代への推移を解明する。機構分析論的部分(第二章から第五章まで)と発展論的部分(第六章から第十二章まで)とよりなるかくの如き構成のたしかさに、諸君は、哲学者にして自から経済学乃至社会主義等の研究をもおこたらず、現代民衆の思索と行動とのために歴史的哲学的原則を寄与しようとするクロォチェの良心を見るであろう。

イタリアが近代国家として成立したのは如何なる時期においてであったか。ほかでもない、自由主義の時期こそ、イタリアを過去の屈辱から近代の自立にみちびいたのである。「そのとき、生活は自由においてしっかりと保証された。古い文化をもった国民の輝いた素質と活溌な精神とこの世紀の力にみちた希望とをもって、イタリア国民は自信をもって外国に発達した方法をとりいれ、

それによってまたいっそうその自信をたかめた。警察の専横はその嫌疑主義やスパイ主義や政治的手段の濫用や訊問主義などとともに一浄され、公共的および私的の生活のすべてを圧迫したイェズイット的な監視主義の卑怯はしりぞけられた。そしてそれらのかわりに、新聞紙その他の出版の完全にちかい自由、言論及び集会結社の自由が支配し、自由が自己を統制し、自由が行政を統制し、自由が法の侵害を防ぎ、司法を公共の統制の下に置いたので、不法や腐敗や停滞や怠惰や瀆職やの余地はほとんどなくなった。……政治的制度のかかる高度の発達にともなって、いたるところ一般民衆が公共生活に参与することができるようになり、政治家は国民に対する責任を重んずるようになり、政治の中心は内務大臣などの官省や警察などにあるべきではなく、国民のなかに、すなわちその国民の信頼をうけた代表者たちの議会および官省に、そして彼等が国民の意志にこたえる討議や実行やそれらを報道し批判しまたは支持する言論のなかに、あるべきことが明かにされた。……社会問題に対しても良心的に公明正大な態度をとることがつとめられ、一八八二年の選挙法改正をもって労働者の代議士また社会主義の代表者の議会に現れることも公認されたので、社会主義また勤労者階級も陰謀とか暴動とか叛乱とかの非合法的手段を棄て、合法的方法によっておだやかに主として勤労国民の経済状態の改善を実現することとなった。かくて、一八八三年には労働傷害に対する国家保険が開始され、婦人労働及び少年労働の制限、就業中の傷害については雇主が全責任を負うこと、これらの議会提出法案も一八八六年には成立実施を見るに至った。一般勤労者に対する養老保険制、労働組合及び農民組合の法的承認、罷業における

団結聯合の自由の擁護、これらを保障する法案も提出された。……古い専制政府は臣民をお祭りぜめにし、臣民が自己の問題を考えたり自由の剝奪を不満としたりするひまはないようにしていたが、今や、自由なる政府はそんな習慣的策略を用いる必要がなかった。……文化の向上普及と民衆化とにともなって、婦人の文化上の活動の機会も拡大された。以前は女性は男性の衣装をつけてでなければ文化上に登場し得なかったのだが、今は女性はその心をひらきその体験を語り女性の立場から貢献することができるようになった。……ユダヤ人排斥というおろかな運動もそのかげをひそめた。ユダヤ人排斥という運動は、先ず排斥によって同じ国民自体の中からユヤダ人なるものを差別待遇し、従って彼等をして団結するのやむなきに至らしめ、その被圧迫の団結の結果を新しい迫害によって抑圧しようというので、すなわちそれは、禍害の原因をつくり出し且つそれを二重三重にするというやりかたで、漸次のそして確実な同化こそ本当の問題の解決の唯一の道であるのに、反ユダヤ主義者等はこの本道とは逆のことをやっていたのだが、この時代にはそうしたユダヤ人排斥の不健全な運動もかげをひそめ、同化の本道にたちかえったようであった。」(第三章)。イタリアは、そうした時代に、近代国家として自立したのである。自由主義に功罪ありとするも、自由主義なかりせばイタリアの近代国家としての自立も実現されることはできなかったのである。しかもいわゆる自由主義の弊害なるものは、実は自由主義をして徹底的に発達せしめなかったことから来ていた。そうした障害またそのための不徹底または裏切りは、すでにいたるところにあらわれつつあった。「さまざまの手段をもって変革的の要求の萌芽をもお

しつぶすに力をつくしながら、イタリアにはそうした変革的勢力の成長の条件がないと主張していたのも、奇妙な安心のしかたであった。」「ダンヌンツィオのような官能的な、野卑な頽廃的な文学者があらわれて来たのも、イタリアの社会の一部の腐敗の醱酵を示した。」（第三章）。「イタリアの大学が保守的伝統主義をその性質とし、知識や方法や慣習の伝承を保守し、特権的職業的人間をつくることを目的とするようになり、大学からは新しい世界観の片鱗も期待することができなくなった」のも、その停滞の表現であった。「『学校』にして同時に『生』である学校、すなわちそれ自身生きている学校は、民間にあって同時に学問と政治との変革を求めている進歩的なひとびとによってつくられた自由なる学校においてのみ見られ、国家の経営し直轄する教育施設にはそうしたものを求めることもできねば、求めることがゆるされもしなくなった。」（第五章）。「目的の徹底がさまたげられ、手段に疑惑が生じ、理念の欠乏が感ぜられたこと、ほかでもないこれらが理由となって、一八九〇年前後から、俄然としてイタリアの青年はその情熱を社会主義の理論に集中するに至った。これはいわゆる国家社会主義ではない。国家社会主義なるものは、社会主義の否定であって、社会主義を屈服し社会主義を解体しようとする方法にほかならなかった。そうした国家社会主義ではなく真の社会主義が求められたのであった。社会主義が、イタリア文化にひとたび失われた内容をふたたびみたし、之に脊椎をあたえたのであった。社会主義は、すくなくとも当時イタリアがその近代的自立の後にはやくも陥ろうとしていた沈滞から、イタリアをまぬかれさせた。政治の考察において制度の法的形式の研究が第二義的なものであることが

明かにされ、そのかわりに経済上の生産および分配およびかの法的形式が表現または擁護または抑圧または排斥しようとしている諸目的の研究が最も重要であることが発見されたのは、近代的社会主義の業績であった。近代社会及びイタリア民衆の現実の状態の研究の必要は、右翼においても賢明なひとびとはすでに前から之を認めて居り、中央党においてもまだ老朽とならぬ若い政治家達、それから、いわゆる講壇社会主義のひとびともこれを認めていた。さればこそ彼等も『社会問題』の存在を公認し、それが制度のメカニズム的機構改革やその場合その場合の制限された対策などの問題でなく、もっと本質的な一般的な問題であることをも承認していたのであった。して見れば、彼等がそれ以上に進み得ないで漫然としていたとき、近代的社会主義の側から、全く別の確信にみちた態度で、その本質が解明されたことをいなむわけにはいかない。当時の民法や刑法は自然法でもなければその適用でもなく、それらは一定の経済的利益、歴史的に条件づけられ歴史的に没落を宣告された利益の擁護にほかならぬことも指摘された。新しい理論は、もとより完全なる真理ではなかったが、真理への接近ではあった。従来、不可抗と考えられていたすべての禍害、貧乏や無智や、それらに伴われた性格薄弱や、それらよりもっと悲しむべき害悪、怠惰と奢侈とより生じたそれら、すなわち、不正や圧迫や、カインの後裔がいまなおアベルの後裔の喉をねらうさまざまの所業、階級間ならびに個人間の残酷な闘争、民族国民間の戦争さえも、近代世界にあるあらゆる無秩序とすべての恐怖とは、資本主義すなわち社会的の生産手段の個人的の所有の影響として分析された。近代社会主義がイタリアにおいて哲学また歴史叙述に新しく

生命を与えたことも看過されることができない。……政治上においてはかの社会主義者たちの愛国の熱情は他のイタリア各政党乃至各政見に立つひとびとのそれとまったく同じで、それらのあいだに上下はなかったといわねばならない。彼等が彼等の祖国を批判したのは、彼等が彼等の祖国を愛したからにほかならぬ。彼等が愛国主義に反対の立場をとるかに見えたのは、彼等自からも声明していたように、あかるみに持ち出されないような内容をもった表面上のいわゆる愛国主義が形式的に自分たちばかりが愛国者であるように大言壮語するのに対する反対にほかならなかった。……しかもまた、このあいだに、あのダンヌンツィオにあらわれたような頽廃のデカダンが、他の方面からも出て来たことも、看過され得ない。社会主義またはいわゆるマルクス主義などの中にさえ、このデカデンツァのモティフがめざして来たところがあり、それらが後にいろいろと発展したものがあった。彼等は、あの『自由』という言葉がしばしば濫用されたことに対する彼等の不信の結果、ついには、自由を軽蔑し、皮肉的にその反対に賛成したものなどもあり、それから『暴力』または『強力』とか『闘争』とか『独裁』とかいう危険な概念を無批判に用いるものもあらわれて来、かくてそれらの、本来は社会的また倫理的の進歩のために考えられた概念が、激情的なまたは暴力的なまたは支配慾にかたまったひとびとなどによって、いまはもとの本来の意味を失って反対のものにされ、自己目的とされたりするようにもなった。……」（第六章）。

「何か強力なものを求める、という傾向がたかまって来た。強力とは何か、何をひとびとは要求するのか、それははっきりしないで、何だかわからぬ『強力』、いわゆる『エネルギイ』が望まれ

たというわけだ。こうしてかのフランチェスコ・クリスピが内相及び外相を兼ねて政府を実際に左右した時期が来た。……それはこういうことだった。すなわち、現在の秩序の根本はすこしも変えたくない、——現在の範囲内で奇蹟をあらわすような独裁がほしい、というのであった。怪しげな独裁の一種の待望であった。……そのあいだに、工業の発達そのものが社会主義の運動をそだてて来た。一八九〇年前後から経済学的、歴史学的また哲学的の学問において考えられていたところが、いま現実の事情によって成長せしめられたのだ。ドイツのウィルヘルム二世すら、『社会問題』は取締りによって窒息させてしまうことはできないものであることを認め、それは『あたたかい心で理解し、いちがいに抑圧せず冷静に理解するために虚心坦懐に研究せねばならぬものである』とした。一八八六年北米合衆国において、一八九〇年国際世界においてプロレタリアトのかたき決意のシムボルとしてメイ・デイが開始されたが、一八九一年にはイタリアにおいてもメイ・デイが祝われた。『労働時間八時間を標準とすること、労働者をして雇主と対等の地位をたもたしむるために労働組合を確立すること、労働者の結合を法人として承認すること。』今日のユウトピアは明日の現実となるであろう。一八九二年イタリア労働者の大会がヂェノアに開かれ、一八九三年ツュリヒにおける国際労働者大会にはイタリア代表としてラブリオラおよびトゥラティが出席し、同年イタリア労働者第二回大会は『イタリア労働者社会党』(Partito socialista dei lavoratori italiani) の公称を決定し、ミラノより出されていた『階級闘争（ロッタ・ディ・クラッセ）』がその機関誌として声明された。デ・アミチのような文学者たちやロムブロゾオのような学者もこれに参加

した。ナポリも国際社会主義の一中心となった。シチリアにイタリア最初の近代的社会主義革命のこころみが起った。そこからいわゆる『ファスチ・ディ・ラヴォラトリ』労働者の結束（ファスチ）の運動がひろがり、社会主義者及びマルクス主義者がこれを指導した。……このとき内閣は銀行問題において醜状を暴露して倒れ、組閣難の後、クリスピは難局収拾の救済者としてふたたび政権の正面に立った。シチリアに向っては武力による包囲が宣告され、ファスチは解散を命ぜられ、指導者たちは逮捕された。クリスピは節約及び新税によって赤字財政を救い、銀行券の流通の秩序は恢復されたが、クリスピの政策にはもはや何等の積極性は失われ、表面は収拾されたにしても、根本を解決すべき何等の方針は示されなかった。そして、緊急の解決を要望されている各種の重要懸案はそのままにしておいて、そのかわりにクリスピは今や全力をあげて社会主義絶滅に当るの態度に出でた。局面打開ではなく局面転換によって一般の注意を当面の諸問題から他に転じさせようとして、彼は無政府主義者取締を口実として猛烈な社会主義圧迫を開始した。しかし、その原因が近代の社会発展そのものにあるような運動を、そうしたただの抑圧の力で絶滅し得るものでないことは明かであった。政府の苛酷な弾圧政策は反対の効果をみちびいてしまった。クリスピが社会主義を攻撃していると信じているあいだに、実は彼はその非常識な取締方針によってイタリア国民一般の自由なる良心を攻撃したことになってしまった。そのゆえに、クリスピ政府下の軍法会議によって重罪の判決をうけたひとびとが一般からは却って満腔の同情を受けるというようなことになってしまったのだ。すなわち、クリスピ政府の逮捕裁判した社会主義者等に対

し、社会主義者やその知友親戚ばかりでなく社会主義でないひとびと、いままでファスチの運動およびそのイデオロギイを非難したひとびとまでが、同情を寄せ、賞讃しさえしはじめたのだ。各地の裁判においては、社会主義者たちを無罪解放すべしとする証人として自由主義者また保守主義者またカトリクまた大学教授また官吏等までが法廷に立言したのであった。補欠選挙では、先に有罪の判決を受けて失格した社会主義者たちがふたたび代議士として選挙された。一八九五年の総選挙には、社会主義者はその議席を八から十二に増大した。有罪判決をうけたひとびとの当選および登院を議院が無効とするや、輿論の抗議のしるしとして此等のひとびとが再選された。そのあいだに、社会党はパルマに第三回大会を開いて、最小限行動綱領を決定公表した。これはすこしの無理や誇張もない妥当な綱領として一般から好意をもって迎えられた。かくて、クリスピの意志に反し、彼等の弾圧的行動の結果として、イタリアにおいて自由主義その他一般の良心による社会主義支持の最初の機会がつくられたのであった。クリスピはビスマルクのそれに類した社会主義弾圧の『五月法令』によって、ビスマルクと同様、予期とは逆の結果に到達してしまったのだ。彼等は却って彼等に対する一般の反対を形成させてしまった。地方においてミラノに『自由同盟』が成立し全国に支部をもったのみならず、中央の議会において左翼からさえ反対派に参加するひとびとが少くなかった。そうした政治的反対のみならず、クリスピの銀行金融界との関係等に必ずしも清浄無垢とばかりいえない点のあったことなどに対する倫理的または、個人的などの反対も加わった。しかも、クリスピ内閣の最後の決定的な崩壊をみちびいたのは、それら

すべての問題ではなくて、そのほかから、実に、クリスピが軍事的成功によってイタリア及びその政府の威信を恢復しようとして議会をも圧倒または無視してアフリカにおいてくわだてた非常行動がはじめは勝利の効果をもあげていたのだが、究局において、一八九六年三月一日あのアドゥアの悲惨な敗戦の大打撃が来たのであった。土民のゲリラ戦はこのときついにイタリア軍を全く窮地に陥れ、イタリア側は二人の将軍と四千六百のイタリアの将士と二百の帰順土民兵とを戦死せしめ、二千の負傷、一千五百のイタリア将士と五百の帰順土民兵との捕虜を出し、砲兵陣地また馬匹その他兵器資材糧秣等の大量を奪われてしまった。国民一般の悲嘆と反感とのまえに、流石のクリスピも一の策を施すべき力をも失い、内閣の冠を挂けた。その後、彼がなお生きていた五年はあわれを極め、文字どおり生き恥じをらさした。かつて強力政治家の勢威をほしいままにした彼の名は、いまや、国民的不幸をみちびいた人のそれとしていたましい記憶に結びつけられた。……」（第七章）。

「のみならず、クリスピ内閣の失脚は、社会主義をしてクリスピによるその弾圧以前どころかそれよりもさらにはるかに大規模に復活いな成長させることとなった。クリスピの左翼迫害政策の下に、右翼は、時流便乗者と恐怖のために反動に従属したような連中との巣窟となり、政治的信用を失墜したし、社会主義は弾圧下に却って訓練されたし、第三の立場すなわち自由の立場のひとびとは社会主義の言動の過度にも賛成しなかったが、政治の反動化はまたあくまで非としていたので、クリスピが倒れ、いわゆる治安維持非常法や強制拘留法が解消され、政事犯が赦免解放

せらるるや、それらのひとびとの多くはただちに国民の選出をうけて代議士として議会に登場し、一八九六年には社会党は最初の日刊機関紙を創刊するにいたった。『アヴンティ』紙はそれであった。一八九七年の総選挙は社会党代議士の数を十二から二十に増大し、此等を含んで左翼は約百の議席を議会に有することとなった。一八九六年ラブリオラが大学の学期はじめに『大学と学問の自由』について述べたことに対し文部大臣が圧迫を行えば、翌年にはピサに開かれた社会主義的大学会議において学説の自由の『神聖にしておかすべからざる所以』が宣言された。クリスピの下に閣僚であったソンニノの如きは、反動の立場から責任内閣制の廃止をとなえたりもしたが、一八九七年の秋にはじまって翌一八九八年四月五月に全伊に拡大しミラノ蹶起に最高潮に達した一般的変革の波は、反動者流の心胆を寒からしめた。これらの暴動が何処においても、ミラノにおいても、決して社会主義者乃至共和主義者たちによって指導され準備された政治的暴動でなかったことは、確実であった。それはまったく、プロレタリアトのみならず一般民衆およびその婦人や子供たちをふくんだ自然発生的の運動であり、武器をももっていなかったのであった。そのことは、警察側がミラノ暴動の五月六乃至九日の三日間に二人の死者を出したのみであったことからも立証されていた。しかもその二人の死者というのも、その一人の警官はひきあげるときにおくれて政府派遣の軍隊のはなった弾丸のためにたおされたのであり、いま一人は兵士で、彼の死がはたしてデモンストレェションの民衆のためであったかそれとも何かほかの原因であったかは遂に明白にされなかった。ところが、取締りの政府側のこの少数の死傷に対して、デモン

ストレェションの民衆の側にあっては八十の死者と四百五十の傷者とが出たのだ。しかもこの数は政府発表の統計の数で、それが真実とはよほどへだたっており、だいぶうちわにしかかぞえていないことはあきらかであった。いずれにせよ、この双方の死傷の数字の比較にならない大小そのものが、何よりも明確に、政府当局の抑圧が、必要の度をはなはだしく超過していたことを、白日の下にさらした。その際、警察が危険なる叛徒を一僧院に追い込み、ついでそこに軍隊が徹底的攻撃を加えたが、それらは後になって見たら僧院の修道士たちや乞食たちにほかならないことがわかった、などという事実や、同じようにグロテスクないくつかの事実をあげるまでもなく、当局が当時如何に狼狽自失していたかは周く知られた。ミラノのみならず、ナポリにおいても、フィレンツェにおいても、その他の各市においても、クリスピの後をうけたルディニ内閣の政府が、戒厳令下に武力を行使したが如きは、まったく失当もはなはだしい処置であった。ルディニ下の警察及び軍隊いな政府当局のこの狂気じみた過度の弾圧処置は、反動階級が如何に自から戦慄していたかをものがたった。彼等は誇大妄想をもって恐るべき風説をつくり出し、これらの虚構の恐怖を全国に宣伝し、国家の存立いな全文化の危機が奇蹟によって救われたなどと公言し、国王ウムベルトをして、ミラノに軍を指揮した将軍バヴァ・ベッカリスに親書を送り大十字勲章を授けしむるなどの事にまでおよんだ。内乱における勝利者には決して栄誉を授けるべきではない、とは古来の慎重な金言であったが、政府は今やこの金言の深い趣旨をもかえりみなかった。軍隊は敵軍と戦争をしたのではなかったのに、反動政府はあたかも敵戦から凱旋したかのように

将軍等を迎えたのであった。牢獄は数百数千のいわゆる政事犯人によってみたされ、新聞紙は抑圧され、すべての労働組合は解散を強制された。数年前クリスピの治下に行われたようなことがふたたびそしてまた一層大規模にくりかえされることとなったのだ。イタリア国民一般の自由の意識は当年の印象を一層深刻にした。こんどはイタリアにおいて軍隊が従来一般から受けていた民衆的な人気がはじめて幾分変化せしめられるようなことにもなった。……当時はまたフランスにおいてドレフュス事件が起った時であった。全イタリアにゾラやその他の人道及び真理の戦士に対する共鳴がたかめられた。自由ということが、単にブルヂョア的または市民的または階級的な思想ではなく、近代の偉大な精神の数世紀にわたる辛苦のたたかいによって道をつけられ確実にされたところの思想であり、文化及び人道の発展のためにかくべからざる緑の野であることが一般の確信となって来た。政治的反動が政治的没落や悲境においては何等かの効果をもち得るものであっても、繁栄と上昇との時代においては決して、或はすくなくとも久しくは決して何等の効果をおさめ得るものでないということも、一般の知るところとなって来た。……しかるに、ここに悲しむべき事件が起った。一九〇〇年七月二十九日一人の無政府主義者によってウムベルト王の暗殺という不祥事が突発したのであった。この不幸な事件の決定的な動機は、ほかでもない、ウムベルト王が反動政府の要請を容れ、親書をあのミラノの民衆運動を抑圧し戒厳令をしき軍法会議による処刑を行った将軍に送られたことにあった、というから、反動政治家たちは良心の苦痛にたえなかったはずである。国民はこの事件を悲しみ、共和主義者たちも社会主義者たちもそ

強化するのあらゆる好機と考えたものもあったが、一般の哀悼の真情に対しさすがにそうした恥しらずの逆行を敢てすることもできなかった。共和主義者にして哲学者たりしボヴィオは云った、かの凶行の一人は王に対しては数年の歳寿を短くしたが、そのために王制に対しては数世紀の延命を献げたことになった、と。新王ヴィクトル・エマヌエレ三世は八月二日の告諭をもって抑圧を非として自由の精神をもって立憲君主制と国民との平和と幸福とを守るべしとされた。」(第八章)。

「政治の上にも強いて越ゆべからざる限界のあること、自からまもるべき限界のあることとの認識があらたにされた。一九〇〇年以後のイタリアは自由なる政治体系の理想にちかづく努力の下にのみ光栄の希望の存することを明かにした。社会主義的の勢力を暴力により警察力のみによって抑圧するという反動主義の主張は、理論的にも実際的にも不可であることが、痛感された。と同時に、社会主義者等の側にも反省を要するもののあることが知られた。一九〇〇年以降の時局を内相乃至首相として主として担当したヂオリッティは自由主義の信念かたく聰明にして実行力ある非凡の政治家であった。彼は無所有の階級の苦悩と要求とに対しても耳をふさぐことなく、口に国家至上をとなえながら実は国家をしてひたすら富と特権との擁護に終始せしめようとする富者と特権者との利己主義に対してはふかくこれらを不快としていた。……議会と政府とはよくその本分をまもって協力し、イタリアの政治生活に積極的な希望が成長した。一九〇〇年から一九〇七年までに、一般教育に対する予算は四千九百万リラから八千五百万リラへと、公共事業のそ

れは七千九百万から一億一千七百万へと、郵便電信事業のそれは六千九百万から一億二千三百万へと、農業に対するそれは一千三百万から二千七百万へと、いたるところ向上が実現された。特に人心を感動させたのはそのヂォリッティ自由主義政府の社会的立法であった。公共保健のための立法、救済事業に関するそれ、傷害保険に関するそれ、婦人および少年の労働に関するそれ、これらが誠意をもって改善され、廢兵保険および養老保険が国家の負担において創始され、パン焼業その他における夜業の禁止、商業および官公業従業員の有給日曜休暇、労働紹介所、民衆会館セットルメント、消費組合その他の協同組合および農業組合等についての新法の配慮が行われ、その際自主的協同組合が公共事業の請負入札に参加するの権利等も認められ、なおマラリアその他に対する予防および治療の公共施設、そのためにキニネ等の大衆需要の薬剤を国家が供給すること、それらの新法も実施された。ヂォリッティは、当時甚しく劣悪であった労働者および農民の生活状態の改善のため、合法的なる罷業権を承認するという誠意をも示した。一九〇六年コンフェデラツィオネ・ゲネラレ・デル・ラヴォロが一般的労働組合としてトリノに中央部をおいて成立したほか、鉄道従事員の組合、官公吏の組合、大学教授および高等中等初等一般学校教師の組合等も、それぞれ自主的に結成せられた。」

「こうした政治および一般生活の上の自由はめざましい経済の繁栄と対応した。イタリアの輸出は一八九〇年から一九〇七年にいたる間に一一八%の上昇増大を示し、当時イギリスのそれは五五%、ドイツのそれは九二%の上昇増大であったのを遙かに凌駕し、一九一〇年にはイタリア輸

出額は実に五十三億二千六百万リラにのぼった。電力の需要消費は一九〇〇年以来すでに五倍し、一九〇五年当時イタリアは全ヨオロッパ中の最大且つ最良の発送電設備を誇ることができたのである（ティチノ河ヴィッツアロ発電所二万三千馬力その他一九〇七年総計二十四万四千馬力。）かの記念すべき一九〇六年六月二十九日の議会において大規模の国債借換が決議せられたとき、これに至るまでの努力の歴史を述べたルッァッティの報告は、政府与党と在野党との両方の議席より満場の拍手をうけ、政治上の主義主張を異にするものも互にあい抱いて感涙にむせぶの光景を現出した。そして外国の政治家たちまた評論家たちもイタリアの行政における、また、立法における、また経済における、その他すべての活動における成功に驚嘆した。マルコニは一九〇二年彼の無線電信によって欧大陸と米大陸とを結びつけた。……しかるに、この一般的繁栄の絶頂に、帝国主義は国際対立を破局的な方向にみちびきつつあった。各国は秘密のうちに欧洲大戦の準備にかりたてられはじめた。すべての人が大戦争について語りはじめたが、しかし内心では何人もそれが本当に来るだろうとは信じていなかった。というのは、そうした戦争から予想される人命および文化の破壊はあまりに恐ろしかったから、そうしたことを考えるだけでもそれは計数の思慮あり理性ある近代の人間の世界にあり得べからざる狂気沙汰とされたのであった。最悪の事態によって戦争がまさに勃発しそうになっても、そのときは必ずや社会主義者たちがその国際的の結合をもってその戦争を防止するであろうし、資本家階級はそうして社会主義の国際的結合を誘致することを恐れ、戦争を敢えてせないであろう、と信ぜられていた。しかし、かくて、イタリ

アが、全欧とおなじように、平和の中に勤労し繁栄していたとき、その土台の下が日一日とすっかり掘りかえされて行ったのであった。」（第九章）。

「経済および政治の一般の急速の発達にしたがって文化および科学また哲学が躍進的に発展した。しかし政治経済上の深刻な矛盾はまたその文化乃至思想の躍進のうらに病的傾向を生じさせた。『ビスマルク主義』は一般精神状態を内心の憂鬱にみちびき、人心は、いま誇大な官能的欲望や侵略慾や権力の過重評価などにふけっていたかと思うと、こんどは何もかも嫌悪したりまたは何にも深い関心がもてないような気持になるというような動揺に陥った。健全な倫理的または宗教的な意識のよりどころが失われたときには、いつもそうした動揺が現われるのであった。ダンヌンツィオ及び彼に代表されたような財閥的な金力と権力との支配の腐敗した心理が横行しはじめ、それらの官能的感覚的欲望主義が非合理主義イルラティオナリスモとか行動的精神主義とかの名の下に流行し出した。非合理主義の道徳的倫理的結果が、人生の深い反省のない単なる行動や、人間的なあたたかさではない動物的な熱狂やをみちびいたように、その論理的結果は、価値と非価値とを区別する能力の喪失をまねいた。クロォチェはこの時期に『批判（ラ・クリティカ）』誌およびそれぞれの著述等をもって哲学的批判の精神により真理と理性との一層の貫徹のためにたたかったが、彼のもとからヂェンティレの如きは時流に誘惑されて非合理主義に屈し『行動のイデアリスモ』等の名の下に哲学の本分を棄てた。——しかし、帝国主義はイタリアばかりではなく、イギリスにも、フランスにも、その他いたるところに、擡頭して来た。そして、あのドレフュス事件などを

はじめとし、ユダヤ人またプロテスタントまた自由主義者その他が『反国家的』または『反国民的』であるというようなことがさかんに云いふらされた。帝国主義はいたるところ民族神話とむすんでひろがって行った。イスパニアまでが『イベリア民族精神』などというようなことをとなえるようにさえなった。(註)――それらの流行は、その後さまざまに変転しさかえたりおとろえたりし、いわゆる『行動的イデアリスモ』なるものなどもやがて概念の誤れる一般化の混合であり、実践の指針としてもあいまいを含んでいるものであることがわかり、結局、正しい方法論により哲学また歴史また批判の精密な労作と明確清潔な概念とによってのみ着実の進歩を得べきことの信念がかたくされねばならなかった。

「イタリアの光栄は、戦争のときにばかり発揮されたのではなく、戦争と戦争との中間の平和のときに発揮されたイタリアの光栄には、いっそう大なるものがあったことも忘れられてはならなかった。一九一二年二月十二日上院が陸海軍に対して感謝の決議を行ったとき、ヂオリッティはその議席より立って、同様の感謝を国内の民衆にささぐべきことにつき一般の注意を喚起した。けだし、国内民衆こそは『階級や社会的地位などの差別をこえて一致して彼等の陸軍及び海軍を支持し、躊躇するところなく彼等の最愛貴重の子弟を祖国のために死線におくっている』のではなかったか、と。しかし、こうした明晰な思想とはちがった性質の思想が次第に勢力を得て来た。ダンヌンツィオ等の官能主義、衝動主義、非合理主義、思想における恣意主義がそれであった。……社会主義の崩壊もひきつづいて甚だしくなった。その左翼からムッソリニのような人物があ

らわれて来た。彼は社会主義を時流にあうようにするために、これにソレルの『暴力』の説やそのほか当時流行して来た所謂行動の神秘主義とか意志主義とかいうものをまぜあわせた。これらは当時多くのひとびとの眼には『理想主義』と見えていたものであった。ムッソリニは、だから、しばしば『理想主義者』といわれ、彼自身も自からそう呼ぶことを好んでいた。彼は左翼の伝統たる民主主義的中央集権に反対の立場をとった。古くからの社会主義者および党の大衆は、これを見て驚愕し、裏切られたことを感じ、抗議を発して、『アヴンティ』紙の新主筆及び彼に従う一派の説は軽率であり奇蹟主義であり、社会主義をマルクス以来の批判的精神及び科学性からユウトピアに退歩させようとするものであり、誤れる戦術によってすべてを失わしめてしまうものである、とした。しかし、彼等は彼のあらしのような進出をどうすることもできなかった。彼等はムッソリニ等の精神的乃至感情的の源泉及びその論理的前提をつかむことも出来なかったのだから、これらを如何ともすることができなかったのだ。彼等は、実証主義（ポジティヴィスモ）に対する反対運動の性質を理解せず、何が真の理想主義（イデアリスモ）であり何が似而非理想主義であるかを明かにすることも、できなかったのであった。……」（第十一章）。

「ついに欧洲大戦がはじめられた。イタリアの社会主義はさきに精神的乃至論理的に内部に崩壊をとどめ得なくなっていたが、いまやそれは実践的に政治上にも解体に瀕した。ここにイタリアの社会主義には分裂がおこり、その一派はイタリアをして積極的に戦争に参加せしめようとして主戦論をとなえた。しかし彼等の主戦論は政府及び支配階級のそれとはちがっていた。彼等は、

戦争から社会的変革をみちびこうとしていたのであり、このことを彼等はかくすことなく公然宣言した。……当時イタリアのナチオナリスト達は、戦争によって勝利に、軍事的名声に到達し、工業的勢力範囲を拡張し自由主義を圧倒して権威主義政権を設立するために、戦争を欲した。そこでは、近代金権政治の鉄血の支配を確立し、社会的イデオロギイだとかさまざまの考慮だとかになやまされることなく財閥と権力との支配を遠慮なく遂行するような、状態をつくり出すために、戦争が欲せられたのであった。だから、彼等にとっては、何人に対して戦争するか、如何にして戦争をはじめるか、これらのことは問題ではなく何でもかまわぬ、ただ戦争がありさえすればよかったのである。彼等は大戦のはじめの数週間にすでにイタリア参戦すべしとし、しかもドイツおよびオーストリアの側に味方すべし、としていたが、イタリアの諸政党政派のなかでもこんな態度をとったのは彼等ナチオナリストたちのほかにはなかった。そして彼等は、このドイツ、オーストリア側に味方したのでは何等の望みをもつことができぬと知って、はじめて、こんどは手のひらをかえすように戦線を転換し、仏英露連合国の側について独墺勢力と戦うべしとしたのであった。……あの芸術上思想上のデカダン官能主義衝動主義者たちダンヌンツィオ等は、このナチオナリストの党の前衛となって参戦熱をあおっていた。彼等の中から『一文学者の良心の検査』などの書があらわれた。彼等はいかなる理念的なる目標をも否定し、勢力の増大とか倫理的向上とかいうような希望をも目標とせず、いな何等かの変化さえ希望せず、ただひたすら彼等の『情熱』の命令に従順に、この瞬間に戦争あらざれば彼等の『情熱』は失われるであろうし、

この瞬間はふたたびかえらず、しかもその瞬間の印象を久しくつよく銘記せんがために、すなわち、そのゆえに、ただ戦争を讃美せんがために、そこに彼等の『情熱』を奔流せしめんがために、そのためにのみ戦争を望んだのであった。彼等は戦争を一の官能的衝動的歓喜として熱狂したのであった。……感情的な情熱的な爆発のために、イタリアの中立の最後の日々に理性をまもることは、容易ではなかった。……ついに国民的統一が行われたが、このときいわゆる国民的統一の強行によって自他の害をなしたものがなくはなかったことは、看過され得ない。参戦主義者たちは街頭に示威行進をさけびおこない、ダンヌンツィオ等もこれらに加わったが、その際のさけびには有害なものもあった。すなわち、宣戦あらざれば国内に変革を見るべしとか、戦争に反対するものをたおせとか、恐喝的な言辞を弄して、議会を軽視し国民の自発的意志の発露をけがしたものもあった。……イタリアがこの熔鉱炉の中で如何にきたえられたか、そしてそこから如何にして新生したか、それはいまだ歴史には属していない。」(第十二章)。

クロォチェの『イタリア史、一八七一―一九一五年』は、かくの如く終っている。クロォチェはそこで、「一九一五年をもって、すなわち、イタリアの世界大戦参加をもって終っている。それは、そこからはじまった時期が、いまだ完結に到達していないからである。それは歴史家の領域には属せず、政治家のそれに属する。」そしてクロォチェは宣言する、「わたくしは、断じて、歴史的研究を政治的論争と混合し混乱させるべきではない、と信じている。問題はのこり、解決がのこっているものがある。しかし、それらの解決は、ここではなく、他の場処において行われ

るであろう」」と。（序言、ナポリ一九二七年十一月）。

クロォチェが『イタリア史』をイタリアの世界大戦参加をもって終っているのは、単に機械的に時間的にそれ以後は現在であってまだ歴史になっていないという理由からではない。そうした意味ならば、クロォチェはあの『歴史叙述の理論及び歴史』において「すべての歴史は現代の歴史である」という原則的認識を明示していたし、ランケの言葉などを引用して過去が「如何にあったか」をそのままに述べるなどという所謂歴史的過去というものと現在というものとを機械的に区別するようなやりかたは素朴な経験主義であって哲学的または歴史哲学的には精確ではないことを論証していたし、過去より未来への発展の現在的統一こそが唯一の歴史的時間であることはクロォチェの実証しつくしたところであった。そして現に、クロォチェは、何人にも先だって、戦争当時においてすでに「戦争に参加した青年たちの手紙が彼等の友や親族等によって公刊され、戦線においてそれら青年たちが如何なる理念のもとに動いていたかをいきいきと示しているものを、何等かの利用的な目的や美辞麗句的な修飾やなどのためでなく、厳密な人間的洞察をもって精確に研究すること」をはじめていたのでもあった。（『イタリア史』註および『戦時論集』）。クロォチェが『イタリア史』を一九一五年をもっておわっているのは、主として、実に、あくまで歴史の学問と政治と互にあいおかすべからざるものがあることを確認するを要す、とする彼の哲学的所信の表現である。さきに『実践の哲学』等においてすでにあきらかにされた点、すなわち理論と実践とはそれぞれその自主をまもり、いやしくもたがいにおかすことなくしてのみ、はじめ

て両者のそれぞれの自主にもとづく真の協力が得られるのであり、かかる協力のみが有益であるということの認識が、ここにも貫徹されたのである。政治が学問を屈服させると、その瞬間から政治は学問からもはや何等の実のあることを期待できなくなるのである。クロォチェは『イタリア史』を一九一五年におわることにおいて、歴史家また哲学者としての学者としての責任をはたし、それ以後の時期については、政治家の責任を問うているのである。

『イタリア史、一八七一—一九一五年』が、一九二七年、いつものようにバリの出版者ラテルツァによって、出版されるや、ただちにその翌年までの一年のあいだに実に三版（その後一九三四年までに五版）をかさねているのをみても、クロォチェのこの良心的名著がその祖国イタリアの民衆によってひろくふかい感銘をもって迎えられたことを知り得る。諸君も祝意をおしまぬであろう。そして、イタリアのみならず、その出版の翌年一九二八年すでにドイツ訳があらわれるというように、この書が国際的に与えた影響にもまた大なるものがあったのである。「クロォチェの仕事は、一言にしていうならば、創造的復興と称すべし。彼の労作は、時流の虚言と悪意とに悩む人間のたましいに永遠の正義と真理とをまもるもののたすけを与える」、とは、『イタリア史』ドイツ版の訳者によって引用された言葉でもあった。クロォチェの『イタリア史、一八七一—一九一五年』は一巻の書であるが、実に現代イタリアの世界にむかって誇ることのできる稀なるドキュメントである。

さかんなるかな、クロォチェは、六十歳をこえて青年のごとくただ学問の自主的任務のために

世界文化の明朗のためにたたかってやまず、名著『イタリア史』を出して、休むまもなく、つづいて一九三一年六十五歳の身をささげて『十九世紀ヨオロッパ史』によりさらに大なる光明を、イタリア民衆に、ヨオロッパに、いな世界におくった。

「自由の宗教」(第一章)、「宗教的信条に反対して」(第二章)、「ロマンティコの運動」(第三章)、「絶対主義に対する抵抗と反対、および勝利、一八一五―三〇年」(第四章)、「自由の運動の進歩、社会民主主義との最初の衝突、一八三〇―四七年」(第五章)、「自由主義的国民主義の諸革命、民主主義的社会的の諸革命、および反動、一八四八―五一年」(第六章)、「革命の再生およびヨオロッパ一般の自由主義的国民主義による組織、一八五一―七〇年」(第七章)、「ドイツの統一とヨオロッパの公共精神の変化、一八七〇年」(第八章)、「自由の時代、一八七一―一九一四年」(第九章)、「国際政治、行動主義および世界戦争、一八七一―一九一四年」(第十章)、の十章およびその後に記された「エピロゴ」より成るこの『現代欧洲史』を一貫しているものは、何だろう。ほかでもない、自由の原則である。いわゆる自由主義の没落の声をもってひとびとが或は互におびやかし、或はひそかにあきらめ、或は自由主義以前の古い考えを自由主義以後の新しい考えのように説きなしているとき、自由とは何ぞや、と、この書の如く自由の不朽の意義を力強く明かにしているものは、現在哲学者の思想の中でもたぐいまれである。

クロォチェは結局自由主義の残滓から脱けきれない過去の思想家だなどという批評が出ようと、クロォチェはびくともしない。そしてそんな批評をしたひとが、自から赤面に堪えないときが来

るだろう。現代において自由主義の没落が叫ばれていることをクロォチェは知らないのではない。聡明なクロォチェは、時流に便乗することこそ知れ何等の独創的思索も綜合的理解もできない粗末な所謂思想家たちよりも、はるかに深く時代の動きを見またそれを積極的に動かすたたかいに身を以って参加しているのである。クロォチェは老いたのではない。六十五歳のクロォチェは、二十代や三十代四十代で老成するような思想的早老者などとはちがい、また何でも一時の風向きのよいほうにいちはやく身を寄せることを新しいことと考えているようなすれっからしの自称青年者流の不感症などともちがって、いつまでも真の青年の純情すなわち真理による未来の進歩の感覚をもって時代の歩みに最も敏感に思索し行動している永遠に若き天才である。自分たちの身分などに都合のよいようなことを国家の要求だとか時代の尖端だとか大声呼号したり、金力や権力を擁護して民衆を圧迫し民衆に憎悪されて殉教者を気取ったりして恥じることをも知らないひとびとも、人間たる限り、あらゆる虚言と反動と恐喝とのなかにただ真理と進歩とのために身をささげ如何に風あたりが強かろうとつねに真の時代の先頭に立って民衆のために精確の針路を求めて辛苦するクロォチェの態度に、深く心を打たれないではいられないだろう。

「自由という倫理的理想が人をして世界から悪を駆逐させもしないしその約束をしもしないではないか、といって、自由はだめだとするひとびとがある。それらのひとびとは、つぎのことをわすれている、すなわち、倫理が悪の理念を破壊し去ってしまうときがあれば、そのときは倫理自身が消え去ってしまうであろうし、ただ実に悪に対するたたかいにおいて倫理は実在し生きた生

命を有するのであり、このたたかいのゆえにこそ倫理は貴重なのである、という事実を。……近代思想の偉大は、自由の本義がたえざる解放に、自由の不断の奪還にあることをあきらかにし、自由とはたえざるたたかいであり、その最後的な決定的な勝利は不可能であるが、それはそうした勝利はあらゆる闘争者の死滅すなわち生きた人間の絶滅を意味するであろうがゆえにほかならず、すなわち人間の生くるかぎり自由は断じて敗北しきってしまうことも決して勝利しきってしまうこともなく、自由のたたかいはつづけられるのであることを解明したことにある。」……実際、「進歩は直線的にではなく、螺旋的に、スクリゥのように行く。新生の危機には自由は反動の力に屈して権威主義がかえって来ることがあり、その自由抑圧の権威的支配はさまざまの起源より来り、その範囲にも大小あり、その時期が久しくつづくこともあろう。だが、自由はそれらの反動や権威主義支配のなかにもはたらきつづけ、ついにそれらをして力尽くるにいたらしめて、ふたたび、こんどは前よりもかしこくつよく再現して来るのである。自由は、形式や状態ではなく、生きる力の根源であるから、これをほろぼすことはできないのである。ナチオナリスモを誤解するひとびとによって、虚栄や物質的な勢力範囲拡大の不遜があおられ、民族や人種が偏見をもって互に排斥して自己のみのうすぐらい欲望をもっぱらにしようとすることもあろうし、歴史の崇拝や尚古やが不健全な偶像崇拝を導くこともあろうし、宗教の尊重から宗教を仮装した狂信が進出することもあろうし、現存の制度の維持ということから保守的な怯懦が生ずることもあろうし、必要な変革を正視する勇気のないものが陋劣の策を施すこともあろうし、経済上の自由というこ

とから、あれこれの一団の利益の擁護の自由ということになることなどもあろう。しかし、それらすべてのあらゆる悪い事情によって弱められようとしまたは誤られまたは攻撃されることは、自由の原則にとって予期せぬことでもなければ、それらによって自由のための運動の実質的な貴重の意義がすこしもきずつけられるのでもなく、それらとたたかうことまたは一時それらによってしりぞけられることによって、自由はつねに新たにより力強く再生するためにきたえられるのである。詩や、論理や、学問が、自由のふかいまじめな不朽の意義を実証する。……」（第一章）。「自由の方法は武器なき予言者の薄弱な方法にすぎぬなどというひとがあるのは可笑しい。事実を見よ。他の如何なる理念のために、自由の理念のためにほど多くの戦がたたかわれ且つ勝たれたことがあるか。自由の理念のためにほど血をおそれぬ戦が自由にたたかわれたことが、ほかにあるか。自由のためにほど果敢と熱誠と頑強とをもってたたかわれた戦が、ほかにあるか。自由の方法の優雅はその弱点ではなくして、自由主義のレエゾン・デエトルであり、その矜持の理由である。自由の方法こそは、その敵とたたかうにも自から自由をその戦の規約とし、反対者の見解に対して寛容の態度をとり、反対者の説をきき、これにまなび、如何なる場合にもあくまで敵をよく知ることをおこたらずおそれず、したがってまた自己の理念と意図とをかくすことなく公然これらを相手に示しておそれることなく、完全なるフェア・プレイをもって最後に完全に勝ち得る唯一の方法ではないか。」（第二章）。「産業革命や、応用科学の賞讃すべき諸発見や、新大陸アメリカと旧ヨオロッパとの関係の変化や、近代の植民地支配に立つ帝国主義の成長や、人口の

急速な増加や、それらすべては、いずれも近代乃至現代の歴史の単なる諸事実であって決して諸要因ではない。またいわゆる精神的諸要因なるものがそれぞれ互に無関係にまたは一は他を制限しまたはいわゆる相互に作用しつつこの歴史をみちびいたのであるのでもない。近代の歴史したがって現代をつくりあげたものは、物質的または精神的のさまざまの諸事実や諸要因などではなく、それらすべてが成した一つの統一、唯一の行程、すなわち自由の信念がそのたえずあらわれて来るつねに新たなる反対者とのたたかいにおいて自からたえず新生し再生し、強力の敵とたたかうことによってますます力強くきたえられ、敵の近代化とたたかいつつ自からいっそう近代化して来た行程にほかならないのである。……」(第三章)。「自由は絶対主義に対して抵抗し抗戦してついに勝った。ユダヤ人を迫害したり、また種痘は動物の血を人間の血に混ずるものであるからといって之を禁止したりした法王的絶対主義の強行的維持はついに無益な努力であった。……国家がその国民に服従のみを強いたとき、自から知らずして国民の活潑さと力強さとを失ってしまい、自から衰弱したのであった。……進歩的または革命的な愛国主義は国民の眼と心とを広くしたが、ドイツのいわゆる愛国主義は国民の眼も心も狭くしてしまった。ドイツを熱愛したイタリアの詩人アレッサンドロ・ポエリオは一八二五年あふれるような好意をいだいてドイツを訪れ、たちまち当時の狂信的なドイツの学生に接して嘔吐をもよおし、憤怒と嫌悪とにみたされてかえって来た。……」(第四章)。

「イタリアの真の愛国者マッツィニはイタリア王制政府のために追放せられ、その追放生活にお

いて彼は、イタリアのためにまた自由のために苦闘するすべての国民民衆のために、偉大なる人生の教師としての影響を与えた。彼は、いわゆる政治家たちの操縦する政策などよりはもっと根本的なものを見た。ほかのことがなし得ないときに、または他のことをなす前に、なされねばならぬあるものを彼は見た。すなわち、民衆のなかに普遍的なるものの感情すなわち自由の理念の精神をよびさますことが、他の如何なる政策や事業よりもさきに着手せねばならぬ緊急の必要であることを彼は知ったのである。そしてそこに民衆各人の『イニシアティヴ』が発揮されることを彼は要求した。『自由の木は、』と彼はいくたびかくりかえした、『自由の木は、民衆の手によって植えられ、民衆の血によってそだてられ、民衆の剣によってまもられるのでなければ、実を結ばぬのである。』と。マッツィニは、自由主義こそ国民国家の独立の運動の源泉である、としたのであった。マッツィニはイタリアのすみからすみまでまたそのほか自由解放を要するあらゆる国国にゲリラ的革命運動を夢みた。彼は必ずしも思想家でもなく政治家でもなかったが、彼ほど、ヨオロッパの生活に知的また倫理的また政治的に影響を与えたものはまれであった。あらゆる国の愛国者また革命家たちは自から彼にむすばれるところあるを感ぜざるを得なかった。各国の絶対主義および保守主義の政府等は彼に対して一日のやすみもなく攻撃をつづけ、或はスパイをはなち或はおとしあなをほり或は挑発をこころみ、手段をえらぶいとまもなく戦いつづけた。しかし、ラムネエは一八三五年マッツィニに書きおくって云った、『勇気を出して大丈夫だ、君よ。母親たちは君のために愛児をおくる。』と。そして母親たちはマッツィニを支持した。一八四六年

イタリアの詩人ヂウスティはうたって云った、『人が信じようと信じまいと、教会堂の鐘は聞く耳をもつひとびとに語っている。その鐘が鳴るたびごとに、自由のために、一人の人間が生れるのだ。さもなければ、一人の無頼漢が棺桶に入るのだ。』……近代の歴史の最初の革命において中世的神権政治が敗北し近代国家およびルネサンスが生れたように、そのつぎの偉大な革命は十七世紀にイギリスにはじまりフランス大革命において全ヨオロッパ的となり、絶対主義に対して自由の政体が決定的に優越を実証したのである……」（第五章）。

「歴史はもはや支配者たちの個人的な記述をやめ、民衆の歴史を記さねばならなくなった。……この時代に歴史の中心に登場して来た労働者階級は物質的な欲望のみで動いているものではない。彼等は生活様式の改善にたいする人間的希望により、または、衣食の必要また失業の防止の必要によってかりたてられている。しかも、彼等はまた正義および幸福また真理の理想にふかく動かされ、それらの理想のために彼等はいつでも彼等の生命をかけてたたかってきたのである。そしてそれらのたたかいによって、政治的理由による死刑の廃止、負債による体刑投獄の廃止、また、普通選挙の実現、それらの進歩も獲得されたのであった。この時代に入って、自由のための運動は、社会問題の解決の要求の進展にむすばれて発達した。当時マルクスは、十九世紀の諸革命が、畢竟するにプロレタリアトの解放の必然を指し示した、とした。ヂオベルティは、この時代の主なる要求を、思想の自由、諸国民の独立、および大多数たる民衆の解放、の三点に見た。……」（第六章）。「一部のひとびとのみが自由を有して他の民衆の自由を抑圧した時代から、民衆の自

由の時代への進歩が必然となったのである。……」(第七章)。

「事実、ビスマルク自身がついには彼がめくら小路に入っていたことをさとった。ビスマルクは社会主義者に対して暴力的な手段をとったが、その結果は全く失敗におわったのであった。すなわち、権威主義の体制また命令主義の方法が結局において無効であること、そして彼の政策は手段をえらばず敵をたおすということにつきていたから外国にたいしてはまだしもその他の方面すなわち国内にたいしてなどはどうもうまく行かないのがあたりまえであったことが、実証され暴露されてしまったのであった。ビスマルクは、社会主義運動にたいしてただもう否定的な消極的な抑圧とか取締とかをこととしてそのほかの何の方法を知りもせず行い得もせず、積極的な方法すなわち自由の方法を彼は信ずることができず、その経験もまったくなかったので、彼は唯一の積極的方法として社会立法なるものをとりあげたが、それは実は政府が労働階級の合法的要求を満足させることにより社会主義からその地盤と刺戟とを奪ってしまうということを目的としたものにすぎなかった。そこで彼は一八八三年には労働者の疾病治療のための基金を設定し、翌一八八四年には労働傷害保険を、一八八九年には労働者の老年および労働能力の喪失に対する保険をはじめた。此等の立法はヨオロッパの社会立法を促進したといわれるが、実はそれらはすでに五十年も前からイギリスなどにおいて活潑に行われていたことをいま行ったにすぎず、それ以前のさらに古い先例のことはここにいちいちかかげないが、似たような立法は絶対王政の支配下にもすでにあったともいえるのである。そして、それらは有益なものであったには相違ないが、その

動機がほんとうに社会の幸福をおもうというより実は社会主義をしりぞけたいということにあったのだから、表面は如何によくともその裏からそうした内実の保守主義的な権威主義的な精神がたえず見えかくれするので、結局、それらの立法は、却って労働者のあいだに不信の念をたかまらせたほかに何の効果があったかうたがわしい。求められているものをあたえないために、求められてもいないものをあたえても、感謝の念がおこらず不信の念がたかまるのはあたりまえのことである。労働者の肉体の切迫した要求をあれこれとみたしてくれても、それが労働者の精神を愚にし意志を弱めるために肉体方面の最小限度の満足をあたえるにすぎぬとわかってみれば、労働者はどうして感謝することができよう。不信の念のみたかまったとしてもあやしむに足りぬ。そして、しかも、おまけに、これらの政府のいわゆる恩恵がその大部分は実は社会主義運動の影響にほかならなかったことが感ぜられさえもした、ではないか。いまビスマルクが労働者たちにあたえた社会立法なるものは、実は社会主義がひさしい以前からそのもとになった理念を創造し、たゆまざるたたかいによってその実現をせまっていたところのものであり、その社会主義にせまられていまビスマルクたちがその一部分をちがったかたちで、いわばいやいやながら、認めたものにすぎなかったではないか。……社会主義は、従来公共生活においてむしろ能動的たり得ず受動的にとどまっていた社会大衆が、いまや能動的に活動する条件を得ようとする向上的上昇的の運動である。だから、それは社会的な運動であって反社会的な運動ではなく、歴史的な運動であって反歴史的な運動ではない。ゆえに、それは、動物的な叛乱のようなものではないから、暴力

をもって反撃して鎮圧屈服し得られるものではないし、また、それは病気のようなものでもないから、慈善や恩恵によってやわらげられたりなおされたりするものでもないのである。そしてこの向上的な上昇の運動としての社会主義は、国家の公務に参加し参与する市民民衆の数を拡大し、従来の支配階級が少数にして貪慾しかも貧弱無能であったものを、今やあらたに新しい民衆を公共政治の正面に立ててゆたかさと活潑さとを発揮させ、新しい熱意をふきこみ、新しい能力をおくり込もうとするものであるから、そこには真に気品高い政治的性格があることが否定され得ない。社会主義がその雑多な蜃気楼をとり去りさまざまの誤れる理論化をすて、その真相をもって立ち、すなわち、新しい市民民衆の創造こそその本来の目的であることを明かにするならば、それが人間的倫理的政治的運動の近代的乃至現代的進歩として、自由の世界に到達しようとするものであることが実証されないではいまい。自由なき社会主義、または自由の方法によらざる社会主義は、真の社会主義ではないということが、漸次に明らかにされて来たのである。この時代、特にいちじるしく一八九〇年以来の工業的発達および生産の進歩は、知的また倫理的また政治的の生活の進歩の条件の充実によって実現され、そしてまたこれらの知的倫理的政治的進歩は生産の進歩によって強められ、つきせぬ源泉をあたえられるのである。……経済上のいわゆる自由主義ということが真の自由主義または自由と混同されたために、経済上のいわゆる自由主義に対する不信が社会的自由、また政治的自由にまでおしおよぼされたのであったが、社会的自由また政治的自由は、いわゆる経済上の自由主義とは、まったく別の、より高き秩序に属するものである。

……立憲的自由の生活体制が如何にいまなお不完全に見えようと、憲法および議会また政党結社の自由の認められなかった時代の政治的生活に比して、如何によりよき政治生活をもたらし、如何なる一般的進歩を実現したかは、見失わされてはならぬのである。だから、議会制度の廃止などの主張は、誠意ある結論として出て来ることができるはずはないのである。議会制度の廃止などではない、如何に議会制度をして完全にその機能を発揮させるにちかづかしめるかこそが問題なのであり、その進歩のためにこそ現代は全力をあぐべきなのであり、かえりみて他を云うべきではない。……」(第九章)。

「マルクス主義社会主義のイデオロギイが、まさにマルクス主義によって没落を宣告されていた社会階級によって逆用されはじめた。階級闘争、ゼネラル・ストライキ、政権の掌握、既存社会秩序の暴力的顚覆、プロレタリアトの独裁、というようなことが、逆のかたちで主張されまたは実行されようとしているかに見える。かくて、社会主義に反対するそれらのひとびとは実は利己主義的個人主義に立ち、民衆を侮蔑しているのだが、いまやかれらが社会主義の方法をまねし、ほんものではないまねだからデマゴオグ的となり民衆煽動というよりも民衆に対して誘惑的挑発的にはたらきかける。彼等はしきりに『大衆』によびかけるが、それは自主的な民衆ではなく盲従する群衆を獲得しようというのであり、群衆を盲目にして衝動的または理智なくただ動物的感覚的にうごくいわゆる愚民として、何ということなしに喝采したり咆えたりする動物の群として取扱おうというのである。そして、こうした群衆、何も考えずにただ喝采したり咆えたりしてい

る動物的群衆だから、かれらをちょっとした大胆さをもった人物が自から指導者と称して彼の思うつぼに勝手に動かすことができるのである。なお、いわゆる人種学者や似而非歴史家たちの理論と称するものが人種民族の闘争なるものをとなえて、暴力沙汰を増長させはじめている。こうして、ゲルマン民族とかラテン民族とか、スラヴとかスカンディナヴィアとかイベリアとかの民族だとか、またヘブライ民族に対するギリシャ民族だとかが、単なる事実としてばかりでなく、互に対立しまた他に服従または絶滅を強いねばやまぬ自然的価値として承認されねばならぬと云い、これらの民族の政治的意識の上に建設が行われねばならぬと云い、そうした人工的な政治的意識の理論なるものが、すでにあちこちに暴力政治の反動的出現に貢献しているのである。流血や殺戮や迫害や残酷やが、恥ずべき汚辱として低級な行為としてさげすまれ非難されしりぞけられないで、目的の達成のためには必要なこととして、許されること、いな、望ましきことであると公言さえされるに至った。それらは、一種の詩的な衣裳をもって人をひきつけるように化粧され、宗教的あるいはむしろ邪教的の神秘のそれに似た一種のスリルとむすびつけられさえし、それらに美を語るものさえあらわれ、それらに英雄的陶酔を説き、ここにこそ人の讃嘆し歓喜することのできるものがあるなどとうたうものもあらわれて来た。これらは、『行動主義』とも呼ばれたが、それは理性を無視する『行動主義』、何でもよい行動のために行動を讃美する『行動主義』であった。

「ヨオロッパは、過去において幾多の試煉と経験とを通ってきたように、今やなおこれらの行動

主義的浪漫主義および盲目痴愚のナチオナリスモを経験し、それらの試煉に堪えねばならぬこととなったのであった。……しかし、欧洲大戦において、ドイツ等は、英仏等連合国側の『戦争宣伝』が彼等のそれよりもすぐれて『組織』されており、はるかに効果的であったことに対し驚嘆を告白せざるを得なかった。その時あのカヴウルの精神とビスマルクのそれとが再びあい対立したのであった。そして今尚前者が後者のもつことのできなかった光明を人類の上にはなち、暖かさをひろげ、熱誠を輝やかせることを得て、ついに勝ったのは、特にあやしむに足りぬことではあった。……」(第十章)。

「大戦を経て世界はどんなに変ったか。ホオヘンツォルレルン帝室のドイツはたおれてドイツは共和制となり、オーストリア帝国は分解し、フランスは一八七〇年に失った地方を恢復し、イタリアはそれまで外国の勢力範囲下に置かれていた土地をとりもどして国境をブレンネル峠までのばすことを得、ポオランドは再建され、ロシアはもはやツァル帝政のそれでなくソヴィエト連邦となり、アメリカ合衆国は米大陸のみならずヨオロッパ政局の関係においても最も重要なる力の一つとして認められるようになった。古いヨオロッパと新しいヨオロッパ、何という深刻な変化。しかしまた、戦争また数百万の人命の殺戮、それらが暴力の習慣をつくり出し、着実の熱意のこもった批判的また建設的の精神的労作の習慣をうちこわしてしまったために、あの一大悲劇の深刻な影響にもかかわらず、そして政治的条件は変ったにもかかわらず、それ以前の確執がそのまま或はいっそう残忍露骨にあらわれて来たところもあった。理性を無視した行動主義が戦前と同

じ衝動的な態度で、いないっそう極端なはげしさをもってひろがって行ったところもある。国家主義者また帝国主義者の爆発的な行動が、勝った国にはその勝利を誇らせ、敗けた国にはその敗北をうらみにおもわせ、それぞれ却っていよいよ我執を燃えあがらせたところもあった。自由の体制による発展を待ちきれないひとびとの性急は、或は公然たる或は仮面をかぶった独裁の擡頭をたすけもした。自由に対する不信が煽られ、憲法また議会等が自由の政治制度としてなお立っているところでさえひとびとの心から自由にたいする信頼の念をおい出すために手段をえらばず策動するものがあり、自由のかわりに手前勝手的な行動主義的似而非自由意志論などがあらわれ、以前にもまして戦争を夢み蹶起や破壊をたのしみややもすれば理性無視の狂信的運動をおこそうとしたり、何かぱっとしたような派手な仕事、内容などは空虚でも無味乾燥でも、誠意や責任などはどうでも、外見だけたいしたものであればよいというような仕事の計画に奔走したりするものが多くなった。ふかく考え愛をもって建設する仕事とか真理とかいうものは自分たちの力にも及ばないし軽蔑するような風潮が横行して来たところもある。人類は久しい辛苦をもって動物的生活から人間的生活に向上して来たのであるが、今やふたたびそれを動物的生活におとそうとするかのような運動や、そうした運動に奉仕しようとするかのような新『哲学』や新『予言者』があらわれても来た。これらすべては現代の事実である。したがって、これらを否定してみても無益であるし、またはそれらをあれこれの少数の人物のことまたはあれこれの国だけに局限されたこととみくびってみても何にもならない。それはヨオロッパいな全世界の事実であり、久しく前

から準備され従って当分つづくであろう事実である。そしてそれらは事実であるから、精神の発展のうえに、社会的また人間的進歩のうえにその役割をはたすに相違ない。それらが新しい価値を直接に創造していないとしても、すくなくともそれらが材料となりまた刺戟となって、古来の価値がそれらとたたかいきたえられることによって強められふかめられひろめられて新生に到達するに役立つのであろう。……『未来の歴史』などということではない、過去のすべての結果としての現在の歴史を精確に知ることが、われわれがはたらくために行動するために必要である。そして真理の光に照らされたあかるい行動でなければ現実の真の行動たり得ない。そしてこの必要のために、われわれはいままで十九世紀の歴史を新たに考えつくすためにつとめて来たのであり、多くのひとびとにそのことをすすめるものであるのである。……真理また倫理また実践の超越的秩序の観念、そして同時に、上からの政府の観念は、内在的の精神によって補正されるのでなければ、完全にむかっての進歩の確実は得られないということは、数世紀の過程によって実証されたところであり、あきらかなことである。すべての真理に絶対性と相対性とのあることを直視するのをおそれる必要はない。されば、たえざる批判と自己批判とによってのみ、真理は、たえず成長し新たにされる生そのものとともに、いつも増大し新たにされるのである。行動主義はいまなおいたるところにあれ狂っている。しかしかれらの精神の平静はどこにあるか、自信はどこにあるか、人生のよろこびは何処にあるか？　悲しみがそれらのひとびと——その最大の威厳に立っているひとびとさえの顔のうえにしるしづけられている。悲しみさえもがしるされていない

場合にはなお悲しむべきことには、そこに粗野の荒涼たる表情または痴愚の表情があらわれている。そしてかの行動主義がしきりに過度に陥り狂信をもって脅迫恐喝的となっているのは、ヨオロッパおよび世界がいま悩んでいる熱病から恢復し健康をとりもどす日の遠くないことを語っている。熱病は理想ではないのである。ロシアの革命家たちがあの道を行ったのは必然であり、他に道はなかったのであった。その意味をちいさく考えることは正しくない。かれらは言葉をもってまた行動をもって反動的暴力を否定しそして方法をもって抑圧を否定したのであった。しかしかれらはいまなお人間諸関係の根本問題を解決してはいない。それは自由の問題である。自由においてのみ人間社会が繁栄しみのりゆたかに結実するのであり、自由こそ地上における人生の唯一の理由であり、自由なくしては人生は生きるねうちを失うのである。自由の問題は現実に存し、これを無くすることはできないのである。自由を抑圧する実験がヨオロッパおよび世界の各地で行われているが、その中からも早いかおそいか自由がふたたび芽ばえて来る。自由とはすなわち人間性のことであるからである。……」(エピロゴ)。

三　現代におけるクロォチェ

真理のために、すなわち人生の進歩の原則の精確なる哲学的歴史的把握のために、そのための民衆の苦闘に、生涯をささげて来たクロォチェは、いまその苦闘の絶頂にある。

民衆を基礎とせねばだめだということは、今日、政治でも学問でも、そうはいわれているが、そういうひとびとが結局役人になったり大学教授になったり著述家の名声をはせたりして民衆の中にではなくその上に立つことを主とし、実際自分が民間にいるあいだは自から浪人などと称し一日も早くまた官的地位につくことを待っている風があり、世間でもあの人は何をしている何もしていない、というような言葉で、官的地位に居れば実際はどんな勝手なことをしていても「何かしている」と云い、民間の学者として苦闘している人を「何もしていない」と云うのが、自他の俗習である。そして人間として「何もしていない」とは甚だ恥ずべきことだから、誰でも毎日何かの地位に就こうとあせるのも無理がない。こうして多くの秀才が実際は「何かをしている」のではない何もしていなくても「何かの地位に就く」ことであくせくし、自他を低下させてしまう。日本では特にこの風がひどい。かつて福沢諭吉先生は、「我国の学問は治者の世界の学問にして恰も政府の一部分たるに過ぎず、試に見よ、徳川の治世二百五十年の間、国内に学校と称す

るものは本政府の設立に非ざれば諸藩のものなり、或は有名の学者なきに非ず、或は大部の著述なきに非ざれども、其学者は必ず人への家来なり、其著書は必ず官の発兌なり、或は浪人に学者もあらん、私の蔵版もあらんと雖ども其浪人は人の家来たらんことを願て得ざりし者なり、其私の蔵版も官版たらんことを希ふて叶はざりし者なり、国内に学者の社中あるを聞かず、議論新聞等の出版あるを聞かず、技芸の教場を見ず、衆議の会席を見ず、其学流もまた治者の名義に背かずして専ら人を治るの道を求め、数百千巻の書を読み了するも官途に就かざれば用を為さざるが如し、日本の学者は政府と名乗る籠の中に閉込められ、此籠を以て己が乾坤と為し、此小乾坤の中に煩悶するものと云ふ可し、籠の外に人間世界のあるを知らざる者なれば、自分の地位を作るの方便を得ず、只管其時代の権力者に依頼して何等の軽蔑を受るも嘗て之を恥るを知らず、学問に権なくして却て世の専制を助く、」とした（『文明論之概略』）。が、これは徳川時代に限ったことでもなく、日本に限ったことでもあるまい。こういう現代の風潮の中で、クロォチェが終始一貫、官界や教授世界などにすこしもひかれることなく、民間学者たることを最大の名誉としたことは、非凡なことである。「クロォチェは幾多の教授の椅子に招聘をうけたが、彼は決して一度も大学教授任命をうけることをいさぎよしとせなかった。……」(Hans Feist : Benedetto Croce. Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 8. Jahrg. Heft 4. 1930.) 口に民衆を云うに止らず、身を以って民衆の間に終始することクロォチェの如きは、現代にも多くその比を見ない。

特殊の専門よりひろく一般にわたり、人生の各般の意識をふかく綜合し、自国の名誉を代表するのみならず世界に真理を解明する「普遍的なる」人格また思想家、かくの如きは現代日本に欠けたるのみならず、洋の東西いずれの国にも稀なるとき、クロォチェはおそらくその稀なる唯一人であるということを、ドイツの学者ハンス・ファイストなども認めているが、クロォチェがよくかくあることを得たのは、実は彼がその哲学と生涯とを民衆のまっただなかに成長させたことにおいて現代にもそのたぐい多からぬ一人であったことによったのである。

ダンヌンツィオが屈したときも、クロォチェは屈しなかった。ダンヌンツィオが好戦主義に加わったとき、またファッシスモに投じたとき、クロォチェがダンヌンツィオの思想はつねに享楽的官能主義デカダン衝動主義にあったことを指摘したことは、すでに諸君の見たところである。チェンティレが屈したときにも、クロォチェは屈しなかった。合理主義の反動として非合理主義が擡頭したとき、クロォチェははやくも一九一三年にすでにこれとたたかって根本的に批判したところがあった(『コンヴェルサツィオニ・クリティケ』第二集)し、その後この非合理主義という似而非理想主義がますます悪性となるにつれて、クロォチェの批判もそれにしたがってきびしくなって行った。非合理主義の「行動の理想主義」者チェンティレは、ついに、クロォチェが理論的行動性と実践的行動性とを精密に区分した周到な差別をも混雑させてしまった。クロォチェは、チェンティレがかく哲学の本分を失ってしまったことを見て、いっそう哲学の本分をまもり真理また理性また自由のために苦闘するの決意をかたくしたのであった(参照、『イタリア史、

一八七一―一九一五年』註)。

かくて、クロォチェは一九二七年、『自由の世界観の哲学的前提』を発表して、真の自由主義の哲学的基礎を解明した。『権威主義支配がひとたび倒されたのちまた復活されても、その打倒以前のままのかたちで完全に復活することができたことはなかった。それはそのあいだに人間も利害も事実的にまた古にかえるよしなく決定的に変ってしまっているからである。してみれば、結局、自由なる政治のみがつねに新しき若さをもって完全に復活し新生して来たのである。しかも、それもよく見れば、権威主義は、自由主義の成長の前に次第に死滅的に衰退しながらなお幾分か復活するにすぎぬが、自由は、実は復活するのではなく、決して死滅しないのである。自由の死はつねに仮死にすぎぬ。そしてこの外見上の敗北または降服において実は一の反動が他の反動によってうちかたれるのである。すなわち、不完全な自由の政治が、自由の方法を用いる能力のない政治によって、うちかたれるのである。しかしこの勝てる反動はそれ自身その勝利をかためるよりどころが全くない。反動は、支配をつづけようと思えば、自から自己を否定し、ふたたび自由の方法のたすけをかりねばならないが、その結果は反動はふたたび全面的にしりぞき自由の方法が新たに立てられることになるのである。鍬が大地をくだいて大地をして新しきみのりを得せしめるように、反動的権威主義は自由主義をくだいて新しい自由の発展を出現させるのである。……自由主義は、今やようやく工業及び農業の労働者大衆が人間的生活に向上して行く発展に、すこしも逆行する理由を自から認めない。自由主義は元来必ずしも資本主義また経済上の自由主義ま

たは自由競争の経済体系と不可分に結びつけられているのではない。それは所有及び生産の様式の段階的進歩にともなって自から段階的に進歩するのである。自由主義が自由主義として主張する唯一の固有の立場また方法は、人間精神のたえざる進歩を確実ならしむるために、如何なる様式にせよ、現存のものの批判および現存のものよりもよりよきものの探求およびその発見およびその実現を妨げるべきではない、とすることにあり、如何なる方法においても、これが完全な人間だとか完全な自働装置だとかに到達し得たと考えるべきでない、とすることにあり、人間が迷いまた過誤におちいることをゆるさないという態度をとるべきではなく、人は迷いまたあやまつこともあればこそ善をつくり出すことができるのであり、善は何人もこれを感じこれをつくり出すことのできるものである、……とすることにある。権威主義の世界観は、理論的に歴史的におのれに反対の世界観を正しく評価し理解する能力がないが、自由主義の世界観はおのれに反対の世界観をも正しく評価し理解し、それをおのれの中に吸収し、かくすることによってその反対者よりも前進することができるという能力がある。このことはたしかに、自由主義的世界観が権威主義的世界観よりもすぐれていることを実証している。……」(Il presupposto filosofico della concezione liberale. Napoli, 1927. Aspetti morali della vita politica. Bari, 1928. ドイツ訳、ドイツ版全集第一編第四巻に収む。)

一九三〇年、オクスフォドにおいて開催された国際哲学者会議は、クロォチェの講演『反歴史主義』をきいた。そこにクロォチェは、「今日のヨオロッパの一部に歴史的感覚を没却しようと

するものがある」ことを指摘した。「それらのひとびとは過去なき未来を夢み、一挙に飛躍する進歩というものを夢想し、歴史の必然を無視した勝手な意志と冒険とを説き、力と行動とを自己目的として讃美する。」こうして「行動主義」なるものまた「権威主義」なるものが、歴史に逆行しようとしている。「過去を無視する運動は必ずしも新しいものではなく、クリスト教徒の古代世界に対してとった態度、また十八世紀の啓蒙運動が近代及び中世の過去に対してとった態度にもそうしたものがあったのだ。しかし、このクリスト教徒たちまた啓蒙主義者たちなどにあっては、一の新しい時代、一の新しい思想及び感情、一の新しい社会の希望があり、それらがこの新しい時代の希望をはばむ過去の桎梏のあまりの強さに対してやむなくすべての過去を無視し罵倒する態度に出ねばならぬところがあったのだ。その誇張また行き過ぎはやはり何としても野蛮的なことではあったが、それらが一の新しい、今迄よりも高い文化段階をもたらそうとしたものであったことを考えれば、それらは成長のための不可避のなやみとして、ゆるされ、何等かの美わしさをもったものとされることもできたのであった。それらは、一の進歩的な理想主義的な積極的な運動であったからである。しかるに、今日のいわゆる行動主義とか権威主義とかいう反歴史また過去無視の運動は、内実において、そうした積極的な面を全くもたず、ただ歴史の必然を否定し、過去において人類が辛苦して闘いとって来た各種の進歩を蹂躙してしまうということにもっぱら力をそそいでいる。実際、現実に、今日の反歴史主義にたとえかすかながらそしてなお未確定ながらでも何かある新しいより高い精神へのはるかなる希望があるだろうか？　残念ながら、如何

にさがし求めてみても、そこにはそうしたものはひとつも見出だされることができない。民衆をして一般にある新しいもの未曾有のもの創造的なるものが近づいて来るのを感じさせるようなものは、そこにはその片影だにないのである。そうしたはるかなる希望、一言にしていえば、愛を感じさせるようなものは、そこには全くないのである。それらの歴史の必然を無視する行動主義者や権威主義者たちはその雄弁術をもって時には愛の絃をかきならし、希望を説いて見せるが、如何にそれがしらじらしくうそらしくひびくことであるか。それに反して彼等の言動には、つねに如何にはげしくまた声高く、暴力また嘲笑また陰険な宿命論また憎悪の音がひびくことであるか。クリスト教はその反歴史主義をもってしてもわれわれに隣人愛をおしえた。啓蒙主義は過去を無視したが、しかしわれわれに人類愛をおしえた。しかるに、今日の反歴史主義は涯限のないエゴイスモと威嚇的な命令とに耽溺し、野卑の乱舞と悪魔崇拝とを強いようとするもののごとくである。世界大戦は青年の花をほろぼしたばかりでなく、数年のひさしきにわたって一般に暴力行為の習慣を強い、問答無用のソルダテスコの訓練と服従とを強い、そうすることによって正に、民衆をして市民的な民衆的な勤勉と個性の自由なる発意とによる平和のたたかいの習慣を忘れさせてしまった。切迫の必要から次第に必要をこえて自由に、また批判の能力にと進んで来た進歩は、平和の時代にはこつこつと一歩一歩苦労してまたやさしくまた厳格にまもりそだてられて来たのであったが、それらはいまや侮蔑され、一挙にして破壊されようとしているかの如くである。そして真理をおそれるところもなく曲げ屈し、勝手のよいようにあれこれとうそをかざり、軽信

をおだて、あらゆる空騒ぎを計画的にまきちらし、そして何か非常なこと、突然のこと、奇蹟的なこと、不可能なことをあてもなくあてにさせるというようなことを事とするものが横行している。かくて、今日の反歴史主義は、何等かの新しい救いのためにやむなくその他面で過去を否定するというようなものではすこしもなく、まったくの精神的貧化、倫理的薄弱、絶望の迷信、神経衰弱、すなわち一の精神病であって、之にうちかつには忍耐と真理の不撓不屈の擁護とによるよりほかないものである。この病的状態は、自由の理念の没却、反自由的の政治形式の擡頭にともなわれている。歴史的思惟と自由の思想とは事実において不可分のものである。だから、あらゆる歴史の定義において、結局、歴史は自由の発展であるとする定義がもっともすぐれている所以である。たしかに歴史の激流のなかからはあるいは神政的、権威主義的、暴力的、反動的などの国家形式や反改革運動や専制暴政や独裁やが擡頭して来たこともあるが、しかしそれらすべての際にもつねにふたたび起り発達し成長したものは結局いつも倫理的また政治的の自由にほかならなかった。自由はかのさまざまの反動の形式のなかから結局自由のはたらきのための用具をきたえ出し、不利を有利に転じ、自己の敗北の中から新しき一層高度の活動への出発を準備したのである。たしかに以前にもすでにしばしば自由の合言葉を棄てさせようとし嘲り侮蔑したものがあったのである。しかしそれらはつねに、自由の発達によって自己の特権がおびやかされ自己の習慣が破壊されるのを感じたひとびとまたは社会階級によって、またはそうしたひとびとや階級によってだまされた民衆群によってなされた軽侮であった。しかるに今日、それらの特権階級の

ほかに、それらに味方してインテリゲンツァたち教養あり理性あり自由の肉親の子たるべきひとびとまでが自由に反対の態度をとり、そうすることによって実は自から侮辱していることを知らないのは、変態的なみせものである。われわれ哲学者は、われわれの見張りのもちばをすててわれわれの敵に従って走り去り未知の目的いな根も葉もない目標などに誘惑されることはできない。自由は、あらしをおそれず、むしろそのふきすさぶにまかせ、そのなかからきたえられ強くなるのみである。自由は批判におびえず、むしろ批判をもとめる。自由は自から批判的にして創造的なる精神であるからである。歴史的感覚に心をとざさぬひとは、もはやひとりではなく、かれらの前に美と真理との使徒また殉教者また創造者として地上にはたらきその仕事においていまなお生きているひとびとの兄弟たり子たり友たる、すべてのひとびとと共に生き、団結するのである。……」(ドイツ訳。Croce: Antihistorismus. Historische Zeitschrift, Band 143, Heft 3, 1931.)

一九三三年、現代の世界の最大の史学協会たるアメリカ歴史協会(The American Historical Associstian)は同年度同協会の大会にイタリアより特にクロォチェの出席を懇請するの決議を行い、同年度の同協会会長チァールス・ビアードの名をもってクロォチェのもとに招待状を発し、そのためにカアネギイの平和基金委員会は特別支出を可決しさえしたが、クロォチェはついにこの出席を実現することができず、しかし、ナポリより同協会会長ビアード博士に対し『歴史叙述の現状についての書簡』を送り、この書簡は同大会において満場の拍手のうちに公開され、一般にふかい感銘をあたえた。クロォチェは、この書簡において、「現代における倫理的精神的歴史

価値の一般的低下」を批判し、「勇気と忍耐とをもって、一歩一歩これを克服すべきこと」を力説した。特に、いわゆる「人種的または民族的史観なるものは、倫理的精神価値を否定して、自然的なる標準をもってこれに代え、歴史をいわば犬や猫や或は肉食動物の各種族のたたかいとして表象させようとするかのごとくである」ことに対し、歴史学は自から清潔をまもり、あくまで「自由なる人間性」の規準を明かにすべきことを論じたのであった。(The American Historical Review, Vol. XXXIX.-2, Jan. 1934.)

クロォチェが現代イタリアの最も偉大なる哲学者たるのみならず、また現代にも稀なる世界的なる普遍的なる思想家たることは、前にも述べたが、この一九三三年のアメリカ歴史協会大会におけるクロォチェ招聘の懇請などの模様をみても、クロォチェが身はイタリアにあって、遠く大洋をこえてアメリカの学界また一般民衆においてまで如何に絶大の尊敬をうけているかを知ることが出来る。この一九三三年度アメリカの歴史協会会長ビアード博士は、現在アメリカの歴史学界また政治学哲学等の学界の最大の人物であり、かつてあの大震災当時の日本に後藤新平等によって招聘せられ東京復興市政の確立の根本に貢献しまたわが学界及び一般に深い影響をあたえたことはわれわれの記憶して忘れ得ぬところでもあるが、このビアードが現代世界の、したがって、アメリカの歴史学また哲学に真実の指導をあたえる思想家としてたえずクロォチェを仰いでいる姿などにも、まことに美しいものがある。アメリカに人なきにはあらず、クロォチェの真摯なる思想が、イタリアの学界を代表するのみならず、世界の学界および文化および民衆に現代の明星

として輝いているからである。

一九三五年、クロォチェは『ラ・クリティカ』誌において、ドイツの文化および学問において起されたいわゆるユダヤ人迫害に対して批判するところがあった。それらのひとびとはいわゆるユダヤ人としてではなくドイツ人としてドイツの文化および学問のために、ドイツの真の光栄のために貢献し献身したのである。「それらのひとびとは、ドイツ語をもって書き、ドイツ語をもってはたらき、ドイツの文化に貢献して来たのであり、ドイツ人であったのである。それらのドイツの貴重な人才をいまユダヤ人として迫害することに如何なる意義と価値とがあるであろうか。」のみならず、「これらのひとびとは、真理と美とにつかえ、ひろく世界の讃嘆する業績に献身し、そこではユダヤ人としてではなく、またドイツ人としてにとどまらず、人間としてまた世界人類のために寄与したのでもあるから、かれらに対する侮辱は人間また世界人類したがってわれわれ自身に対する侮辱として感ぜざるを得ないものでもある。……」(La Critica. 1935.)

一九三七年、アメリカの知識階級のあいだに最大の影響力をもっている『ニュウ・レパブリク』誌は、次の三点について、ベネデト・クロォチェの見解を問うた。一、「貴下は、政治上の民主主義がいまや衰退にのぞみつつあり、と考えらるるや?」二、「貴下は、権威主義支配は民主主義よりも優越すると考えらるるや、そして、もししからば、その理由は如何?」三、「貴下は、個性の発達にとって安全の不可侵と自由とは欠くべからざるものであるということを認めらるるや?いずれの場合にせよ、それについて貴下の理由を示していただけましょうか?」

これに対して、クロォチェは答えていった。

「ひとびとはしばしば問う、『君は世界が権威主義政治にむかっていると思うか？』哲学は一の新なる反理想主義的なる現実主義に行きつつあるか？』そのほかにそういったようなことをきくひとが少くない。わたくしはこの種の質問を『気象学的』質問と呼ぶことにしている。それはちょうど、『君は今日雨が降ると思うか？　ぼくは雨傘をもっていったほうがいいだろうか？』ときくひとの質問に似ているからだ。けれども、倫理的、知的、また政治的などの問題は、雨や晴の天候のように、われわれの外にあるものではない。それらはわれわれの内部にある問題である。してみれば、それらについて何かが起るだろうか起らないだろうかということをひとにきいてみることは意味をなさないのであって、唯一の正しい方法は、われわれのひとりびとりが自からはたらいて、それらをおのおのの良心と見識と自己の能力とにしたがって解決するよりほかないのである。

「わたくしはなおここに明かにしておきたいと思うが、今日自由に対して加えられているさまざまの侮辱のなかでも、最も重大とせられねばならぬのは、自由なる政治と権威主義政治とはどちらをえらんだらよいかなどという質問である。

「わたくしは思いだす、あの男の話を。その男は彼の友人にむかってきいたというのだ、『ぼくはぼくの顔をひっぱたかれた。どうしたらいいだろう？』と。その友人は答えたという、『そのひっぱたかれた顔をだいていたらいいだろう』と。明らかに、人としてのおのれの名誉にかかわ

る事件について他人に質問などをしている人は、そのときすでに彼自身彼の名誉をまもることをやめたものとみなされねばならぬ。

「自由ということ、と、自由の抑圧ということ、とは、同じ対等の高さに立っているものではない。このふたつのごとは、ひとが理性にしたがってその一つを他よりもすぐれているとえらぶことのできるふたつの価値の相違したもののように、ならべて考えられることのできるものではない。何故ならば、前者すなわち自由とは、人間の貴重な品格を意味し、文明を意味する、に反して、後者すなわち自由の抑圧とは、人間をひき下げて牧場にみちびき出された家畜の群か捕え馴らされた野獣かに似たようなものに下落させることを意味するからである。

「わが現代を考えるとき、わたくしの眼に、自由の将来はつねにますます光り輝くであろうとしか見えない。わたくしは権威主義に如何なる光明の約束をも見ることができない。過去においては、権威なるものは、神権政治の形式においてにせよ王政のそれにおいてにせよまた寡頭政治のそれにおいてにせよ、一の宗教的神秘的地盤をもっていた。そしてそうした宗教的神秘的地盤は、近代のヒュウマニズムの思想によって明確な人間的な理想におきかえられたのであった。しかるに、今日の権威主義または未来のそれと称するものは、あらゆる雄弁のつくりばなしや狂信にもかかわらず、内実において似而非宗教的であり物質慾主義的であり、それらは結局単に力によって民衆を従わしむる野卑残忍の支配ということよりほかのものではなく、そこにおいては民衆は見ることもゆるされず知ることもゆるされず、何でもかまわぬただみちびかれて盲従することとし

かゆるされないのである。

「この盲従をいますこしく想像的な上品な英雄的なものにひきあげるために、ディシプリナ・ミリタアレということが云われるのが一般の習慣である。ディシプリナ・ミリタアレは社会の構成の一部分としては有益なものである。しかし、もしも、それが社会の一部として社会にふくまれていることに満足せずに、それが社会の全部にひろがり却ってそれが社会をふくんでしまうようなことになると、それはもはやディシプリナ・ミリタアレではなく、理智の抑圧ということとなる。芸術家や科学者や政治家が整列して命令を待ち、命令一下すれば盲従してその命令を実行するというようなことになったとすれば、それはもはや芸術家や科学者や政治家ではなくなっているのである。

「しかし、いずれにせよ、悪は、もし悪があるとすれば、それはわれわれの内部に存するのである。したがってまた、改善の方法も、われわれの内部に、しかり、まったくわれわれの内部にのみ存するのである。救いをわれわれの外部のなにものかにさがし求めることは無益である。

「自由を原則とする政府は、その憲法そのものによって被治者民衆を政府の仕事に参加し得るように教育し、こうして、たえずより多くのより優れたひとびとが政治に参加し発言し批判し実行して行くことができるようにするのである。このことが誠意をもって実現されてゆくならば、そこに衆愚政治などが行われるようになることもなく、従ってそこから知らぬまに独裁政治がみちびかれるようなこともないのである。

「善意あるひとびとに対する実践的結論は、つねに、あらゆる条件の下に、如何なる方法や手段をも活用して（そしてこれらの方法や手段は数限りなくまたさまざまのものがあり、また日々に新しくおこって来るであろう）、自由の精神をまもり且つこれを新しく生かし、必ずこの目的にみちびくようなものであって決してこの目的をうらぎりまたはおきかえてしまうようなものでないかぎり、あらゆる場合に最も適当な方法を研究して、つねにはたらいてやむなかれ、ということである。

「一の理想のためにはたらく者は、誰でも、必ずそのはたらきそのものにかれの希望とよろこびとをもつことができる。それにもかかわらず彼のかよわき肉体はいますこしく確定的な希望のよろこびを求めるかもしれぬ。そしてそれも得ることができるだろう、もし、かれが、世界の現在の条件の下においても理智的また倫理的の能力の総計はなおいかに大であるかを想起し、自由がなお幾多の大きく力強き国々に発展しつつあり、それらはそのそれぞれを脅威する危険に充分対抗し且つ一般的なる復活と新生との燈台としてはたらくであろうことを想起するならば。のみならず、現在権威主義の下にあるところにおいてさえ、それまでに発達していた自由の効果や影響はのこっており、それらはいまなおつづいているさまざまの能力においてはたらきつづけているのであり、それらの権威主義政治も、それらを抑圧し、それらの萌芽をおしつぶし、そうすることによって将来のためのさまざまの生産的な力を破壊しまたは危くしつつも、これらのさまざまの生産的な力を彼等自身彼等の権力を維持するためには必要とするのだから、やはりそれらの自

由の効果や影響ののこっておりつづいているものを利用せねばならぬところもあるのである。

「しかし、また、われわれは起り得べき最悪の場合をも見とおしておこう。想像せらるべき最悪の場合とは、今日世界にあれくるっている闘争がついにいままで権威主義などに感染していなかった国々さえにおいて自由の敗北そしていわゆる『全体主義』の類の権威主義の勝利におわるというようなことが起った場合であろう。よろしい、それは人生の劣敗を意味する。しかし、その際にも、そこから自由の過程は必然的にふたたび新たにはじまり、一時破られはしたが将来においてはついに勝つであろうところのあのさまざまの力を地盤として再生を開始するであろうことは、また確実にしてうたがいのないところである。

「最後の質問については、次の質問によって答えるよりほか方法はない、――『いったい各人がその事務を処理するにあたり、他人にそれをすき勝手に処理する無制限の権力をあたえ、本人自身それに関係しまたは不同意あらば不同意をとなえまた疑問があればそれを発言するといったような権限をも全く放棄してしまって全く他人まかせにすることが、最善の方法であるかどうか？』

……」

この公開状はアメリカにおいて大なる影響をあたえたばかりでなく、世界の識者をうごかした。かのザ・マンチェスタア・ガアディアン紙のごとき、イギリスの知識階級を代表するのみならず世界的なる大新聞の実力をもっていることは諸君の知らるるとおりであるが、同紙はただちに、クロォチェおよび『ニュウ・レパブリク』編集局の承諾を得て、これをその紙面にかかげ、且つ、

社説をもって、「真の哲学的な心の特徴たる見とおしのひろさ、個別の見解の対立から脱却して、普遍的見解に到達する能力」に深甚の敬意を表し、これこそ、「行動を批判することは敢て之を謝絶するが、理念を批判することには敢て仮借せざるもの」ということができよう、とした。「彼にむかって質問された三点の問題についてのクロォチェの取扱および彼の回答には、すこしも党派的なところがない。彼の回答は現代の意識を照明していて、しかも決して苛察に陥っていない。クロォチェはかつて彼の『イタリア史』において宣言していた。彼は『あくまで自由をまもろうとするものである。しかしそれは、自由が力すなわち政権への意志を約束するからではなく、自由が意志への力すなわち倫理的自覚への力を約束するからである』と。最後には自由が勝つということについて彼は何等の疑をもっていない。権威主義の勝利が如何に完全に見えようともそこに『自由の過程は必然的にふたたび新たにはじめられるであろう』という彼の確信は、彼の全生涯のひさしきにわたる、歴史および精神の歴史たる哲学の研究の結果にもとづいているのである。之は今日のわれわれにとって一の偉大な希望であり真の信念である。」(TheM anchester Guardian Weekly, April 2, 1937.)

思想の超党派性については、クロォチェ自身がその『実践の哲学』等においてその所見を解明していたところのあったことを、諸君は忘れないだろう。最高の思想の擁護者としてクロォチェが現代において名実ともに真に世界的なる哲学者として輝いている所以をも諸君は了解したであろう。そして、かくのごときは、実にクロォチェがつねに民衆の中に終始していたことによって、

かくあり得たのであることも、諸君のすでに知ったところである。そして実にこれこそまた、クロォチェがかのファシストのイタリアにあって自由の思想を堅持し、『ラ・クリティカ』誌等をもって、あるいはまたあの『歴史叙述の理論及び歴史』以来の彼の哲学と歴史との一致の理論をその後の彼の深刻なる現実の体験によって、いな「新しき人生経験によって刺戟せられ」て精密にした『歴史』すなわち『思想としての、また、行動としての、歴史』の哲学論集の最近の公刊等をもって、哲学的批判の精神の積極的活動をつづけ得ている所以である。これは、自立の思想家ベネデト・クロォチェをファシズムの時代にも尊敬しつづけたるイタリアの名誉であり、またクロォチェの名誉であり、思想の超党派性のために万丈の気を不朽にはいているものである。その超党派性とは、理論としての思想また学問が、経験としての政治のいずれの党派にも従属することなく、ただあくまで真理への理性の唯一の党派をまもるということである。そこにクロォチェは立っているのである。

――「歴史家は、事実を希望によってはからない。事実を希望によってはかれば、希望は本来はかることのできないものだから、事実は希望に比較されればつねにはなはだちいさなまたは劣ったものにしか見えぬ。しかし歴史家は、事実を希望によってはからず、つねに事実をそれ以前の事実によってはかるのである。そして如何なる意味において条件が変化したか、そしてどんなことが新しく且つ積極的に起って来たかを観測するのである。」――(クロォチェ『十九世紀ヨオロッパ史』)。

解説

久野　収

〃われわれを汚辱の中にしばりつける鉄鎖、
この鉄鎖からわれわれはかがやく剣をきたえ出すのだ〃
Aus der Kette, die uns entehrt.
Schmieden wir ein glänzenden Schwert

この何かただならぬ決意を秘めた言葉は、中世ドイツの農民たちが一揆のむしろ旗に大きく書きこんだ誓いの言葉である。

私がこの言葉にはじめて接し、深い感銘を与えられたのは、戦争のあらしの中で羽仁さんの書斎をおとずれた時であった。この言葉のきざまれた銅版画の複製が仕事机の前の壁に貼られていて、仕事をおいて頭をあげると否応なしに目にやきつけられるようになっていた。一切の公職をうばわれ、すべての仲間との交際をほとんど絶ちきり、昼も夜も書斎の中に身をうずめながら、この言葉を唯一の友として、「ミケルアンジェロ」や「明治維新」や「クロォチェ」を書きつづ

ける羽仁さんの気持が私の胸をゆり動かしたのであろう。私は今もこの言葉を昨日のことのようにはっきりと記憶しているのである。

すでに昭和八年の思想事件で羽仁さんは投獄されて、アウト・ロウの位置に放逐されてしまっていた。当時の思想犯は政府によって国民の仲間には属しない非人間として扱われた。だから何回でも投獄されて、全くの非国民となる危険をおかさないかぎり、自分の立場をひそかに持ちつづけることさえはなはだしく困難であった。かつて学問と良心を守って政治権力の無謀な国策に抵抗した思想家たちが、ほとんど例外なしにカメレオン的変身をはじめ、誰が何を考えているのか、誰がどこにつながりを持っているのかが全然わからない危険な状態が生み出されてきたのである。

その上、カメレオンたちをあやつる連中は政治権力とつながっている思想的テロリストたちであった。この連中が学問や思想をむざんな仕方でふみにじったのである。

当時羽仁さんの数少い仲間の一人であった林達夫さんは次のように語っている。「私はこれまで見たこともない怪奇な観念的兇器をふりかざして大道を濶歩する思想的テロリストや、そのあとに随いて廻る得態の知れぬ『護符』の押売り屋の難を避けるため、わが家の周りにささやかな垣根をめぐらして、成るべく人目につかぬように暮していた。それでも、垣根の彼方に日増しに高まる人声やどよめきが気になって、時たま広場の市に出向いてそっと人混みの中に立ってみる衝動を禁じ得なかった。そこには、巨大な『虚構』の祭壇がしつらえられていて、例の怪物ども

が代る代る、或る者は剣にかけて、或る者は『真理』にかけて、或る者は『正義』にかけて、一所懸命生贄を捧げている異様な光景が見られた。」(林達夫「歴史の暮方」序)

このような時代の恐ろしさと無気味さは、その時代の中で生きた人間でなければとうていわかることはできない。私はその恐ろしさと無気味さを恐らく生涯忘れることができないであろう。

羽仁さんがカメレオンの仲間たちと別れて、単に自分の立場を消極的に守るのみならず、純粋な学問の立場だけをよりどころにして、怪物どもに積極的に戦を挑んだのは、まさにこのような雰囲気の中であった。羽仁さんはこの戦を勇気や決断といった仰々しい身ぶりに立っておこなったのではない。仁人的勇気や決断は一たんくずれた場合、目もあてられぬ結果をもたらすからである。志士羽仁さんはあくまで歴史学という学問に立って、学問的方法を厳密に守り、深めながら、それから必然的に出された結論によって、時代を批判し、怪物どもを批判したのである。だから政治権力も怪物たちもしばらくの間はどうすることもできなかった。怪物たちの中でも学問的良心の一片をまだ残していた者たちは、羽仁さんの業績を認めないわけにはいかなかった。その意味で戦争中の羽仁さんの仕事は、学問というものが時代に抗してどれだけのことをなしうるかの限界を示す貴重な記録であるとみることができる。

「笑ふにも涙こぼるる世の中に泣きつつ笑める人も有けり」(香川景樹)「終にはとおもふ心のなかりせばけふのくやしさいきてあらめや」(木下幸文「貧窮百首」)「燈火のもとに夜な〳〵来れ鬼、我がひめ歌の限りきかせむ」(橘曙覽)。「明治維新」の中でこれらの歌を学問的立証のため

に引用している著者の気持は、学問的立証だけにつきないものを持っているのである。
羽仁さんの戦争中の著作は、真剣に生きている国民の中に実に多くの読者を見出した。例えば河合栄治郎教授は、政治権力の言論抑圧に対する命を賭けた戦の日記に、次ぎのようにしるしていた。「羽仁五郎氏の『クロォチェ』を夜の十一時頃から読み出し、一時半まで一息に読み終えた。ファッシスト・イタリに於て自由主義を堅持して屈しない此の哲人は、自分を叱咤鞭撻して奮い起たしめた、それと同時にムッソリーニさえも手の着けられないクロォチェに比して、起訴されて自分を情ないなと忸怩たるものがあった。」
またノモンハンで戦死した阿江一友君が戦場で書き残した手記「不死鳥」の中にも次ぎのように書かれている。「御紹介下さった『ミケルアンジェロ』も先月来、旅順の書店で買求めて熟読したものでフィレンツ・ルネッサンスのほんとの意義を教えられ、また民衆の進歩性をこれほどはっきり教えられたことはかつてなかったほどいい感銘を受けました。さすがに羽仁五郎の作品です。氏の変らざる美しい努力に敬意を捧げたい気持で一杯です。」「自由への自覚、民衆の力。独立の精神、ミケルアンジェロを知る。大いなる力を与えられたる日なり。」『羽仁五郎著の「ミケルアンジェロ』を読みはじめる。フィレンツェ・ルネサンスの本質を知る。自由都市フィレンツェによって自由の真価値を知る。自由こそ文化を高める源泉なり。」
「不死鳥」は昭和十六年八月の出版であって、本人がダイヤモンド社の社長石山賢吉氏と特別の関係にあり、かつ戦死後であったために、かろうじて陽の目をみることができたと思えるほど、

当時の良心的インテリゲンチャの気持と態度がいつわるところなく出ている一個の貴重なドキュメントである。

そのほかこれに類する記録は非常に多く求めることができるのである。「ミケルアンジェロ」の中には「屈せざる希望」という言葉がしばしば出てくるのであるが、民衆は「屈せざる希望」を求めて、羽仁さんの幾つかの書物におもむいたのであろう。

「クロォチェ」は昭和十四年十二月に出版された。この書は元来、三木清氏の編集にかかる「廿世紀思想」という叢書の第一冊「理想主義」の一部として執筆され、予定よりも分量がはるかに大きくなったために独立の書物として刊行されたのである。

昭和十五年は、いうまでもなく日本が太平洋戦争に突入する前年であり、思想弾圧がもはやほとんどその頂点に達した時代である。共産主義者や社会主義者はほとんどもれなく投獄されるか、転向するかしてしまっていた。学界においてもマルクス主義学者はほとんどあますところなく追放されたり、投獄されたり、沈黙を余儀なくされていた。自由主義勢力の最後の組織的抵抗であった京大事件が敗北に終ってからすでに七年、その間学界及び論壇の「清掃工作」は、政治権力の手先と怪物どもとの同盟によって休みなくつづけられ、日本を破滅におとしいれた戦争への大道が掃き清められつつあった。

反ファシズムの非常に微温な組織であった「唯物論研究会」や「世界文化」グループも強制的に解散させられ、活動的メンバーの大部分は、検挙されたり、投獄されたりしていたのである。

政治的発言を細心に警戒し、用心に用心を重ねていられた大内兵衛教授をはじめとする多くの学者たちも怪物たちの策動によってついに検挙せられ、裁判が秘密裡に進行中であった。

それどころではない。反共理論の最も果敢な主張者の一人に数えられた骨のある自由主義者河合栄治郎教授の身辺まで言論弾圧の手はのびていたのである。

羽仁さんの「クロォチェ」が出版されたのはこのような情況の下であった。本書を読まれる読者は、本書がこれほどの力作であるにもかかわらず、著者の序文が全然書かれていないという事実を恐らく奇異に感じられるであろう。これは著者が序文を書かなかったのではなく、書けなかったことを物語っているのである。序文を書くとすれば、著者はその中でどうしても意図を書かなければならない。意図を書けば、権力と怪物の手先たちは直ちに著者をつかまえる危険が多分に存在した。更に序文を書けば、執筆の日附を書かなければならない。当時の書物の序文はほとんど例外なしに日本紀元の日附をつけ、おまけに皇軍の勝利をほめたたえていた。幾人かの著作家たちは、日本紀元の代りに、昭和何年何月と書くことによってひそかなる抵抗をかろうじて表現していたほどであった。歴史学上虚偽の判決ずみの日本紀元を書き、戦争についてほんの少しでも肯定的な言葉を弄するとすれば、それはこの書物全体の自殺を意味することになる。だから序文が書けなかったのは当然のことであった。本書の内容が原著者クロォチェからの非常に多くの引用でうずめられているのもその間の消息を物語る事実である。

原形のまま今新しく市民文庫の一冊として多くの読者の手におくられる本書「クロォチェ」は、

ほんとうの学問の魂が最悪の反動期の中でいかなる仕事を果しうるかを示す立派な記念碑であるということができよう。

昭和二十八年五月十日　初版印刷
昭和二十八年五月十五日　初版發行

定價　六拾圓

著者　羽仁五郎（はにごろう）

發行者　河出孝雄
東京都千代田區神田小川町三ノ八

印刷者　堀鐵判
東京都千代田區飯田町一ノ二八

發行所　株式會社　河出書房
東京都千代田區神田小川町三ノ八
振替口座東京一〇八〇二

印刷・株式會社 文弘社